

抒 情 歌 集

桐 の 花

著 及 画

北 原 白 秋

東 京

東 雲 堂

わがこの哀れなる抒情歌集を誰にかは献げむ

はらからよわが友よ忘れえぬ人びとよ

凡てこれわかき日のいとはしき夢のきれはし

Tonka John

桐の花とカステラ

27.V.10

桐の花とカステラの時季となつた。私は何時も桐の花が咲くと冷めたい吹笛〔フルート〕の哀音を思ひ出す。五月がきて東京の西洋料理店〔レストラン〕の階上にさはやかな夏帽子の淡青い麦稈のにはひが染みわたるところになると、妙にカステラが粉つぽく見えてくる。さうして若い客人のまへに食卓の上の薄いフラスコの水にちらつく桐の淡紫色とその暖味のある新しい黄色さとがよく調和して、晩春と初夏とのやはらかい氣息のアレンジメントをしみじみと感ぜしめる。私にはそのばさばさしてどこか手さはりの渋いカステラがかかる場合何より好ましく味はれるのである。粉つぽい新しさ、タッチのフレッシュな印象、実際触〔さは〕つて見ても懐かしいではないか。同じ黄色な菓子でも飴のやうに滑〔すべ〕つこいのはぬめぬめした油絵や水で洗ひあげたやうな水彩画と同様に近代人の繊細な感覚に快い反応を起しうる事は到底不可能である。

新様の仏蘭西芸術のなつかしさはその品の高い鋭敏な新しいタッチの面白さにある。一寸触つても指に付いてくる六月の棕櫚の花粉のやうに、月夜の温室の薄い硝子のなかに、

絶えず淡緑の細花を顫はせてゐるキンギン草のやうに、うら若い女の肌の弾力のある軟味に冷々とにじみいづる夏の日の冷めたい汗のやうに、近代人の神経は痛いほど常に顫へて居らねばならぬ。私はそんな風に感じたいのである。

＊

短歌は一箇の小さい緑の古宝玉である、古い悲哀時代のセンチメントの精〔エツキス〕である。古いけれども棄てがたい、その完成した美しい形は東洋人の二千年來の悲哀のさまざまな追憶〔おもひで〕に依てたとへがたない悲しい光沢をつけられてゐる。その面には玉蟲のやうな光やつつましい杏仁水のやうな匂乃至一絃琴や古い日本の笛のやうな素朴な Lied のリズムが動〔うご〕いてゐる。なつかしいではないか、若いロセツチが生命の家のよろこびを古いソネットの形式に寄せたやうに私も奔放自由なシムフオニーの新曲に自己の全感覚を響かすあとから、寥しい一絃の古琴を新しい悲しい指さきでこころもちよく爪弾したところで少しも差支へはない筈だ。市井の俗人すらその忙がしい銀行事務の折々には一鉢のシネラリヤの花になにとはなきデリケエトな目ざしを送ることもあるで

はないか。私はそんな風に短歌の句に親しみたいのである。

＊

その小さい緑の古宝玉はよく香料のうつり香の新しい汗のにじんだ私の掌にも載り、ウイスキーや黄色いカステラの付いた指のさきにも触れる。而して時と処と私の気分の相違により、ある時は桐の花の淡い匂を反射し、また草わかばの淡緑にも映り、或はあるかなきかの刺のあとから赤い血の一滴をすら点ぜられる。

私は無論この古宝玉の優しい触感を愛してゐる。而已ならず近代の新しいそして繊細な五官の汗と静ころなき青年の濃かな氣息に依て染々とした特殊の光沢を付加へたいのである。併し私はその完成された形の放つ深い悲哀を知つてゐる。実際完成されたものほどかなしいものはあるまい、四十過ぎた世帯くづしの仲居が時折わかい半玉のやうなデリケートな目つきするほどさびしく見られるものはない。わかい人のところはもつと複雑かぎりなき未成の音楽に憧がれてゐる。マネにゆき、ドガにゆき、ゴッホにゆき、アンドレ・ユニフにゆき、シュトラウス、ポオドレエル、ロオデンバッツハの感覚と形式にゆく。かの

小さな緑玉「エメロウド」の古色は私がそれらの強烈な色彩の歓楽に疲れたとき、やるせない魂「たましひ」の余韻を時としてしんみりと指の間から通はすだけの事である。即かりそめの病に飲む一杯の古いシャンペンの味である。

＊

私の哀しい Nostalgia がまた一絃の古琴にたまたま微かな月光の如くつかずはなれず付纏ふ時に、ある若い人達の集団はこれを唯一の楽器として、行往座臥、凡ての清新な情緒「センチメント」と凡ての苦い神経の悦楽とを委ねて満足してゐる。新人の悲哀は古い詠嘆の絃にのぼせて象徴の世界を觀照すべくあまりに複雑であり深刻であり而かも而かも傷ましいほど痛烈である、わが友よ、古い器樂の悲哀を知れ。さうしてその幽かな哀調の色に執し過ぎて些かだにその至醇なる謙讓の美德を傷つくるな。

ある時はビーヤホールのかたかげにその慎しい音色を懷かしむこともある。しかし私には白昼夏の光のふりそそぐ日比谷公園の音楽堂の上に、凡ての満足と充実した凡ての生の歡喜とを以てその古琴独奏の衿を衆人の目前に曝すだけの勇氣はない。そはあまりに無慘

である。新人よ、汝の意の趣くままに、汝の心境の移りゆくままに、ある時は新しい戯曲に、小説に、パントマイムに、秋の日のはかないロマンツアに、太掉に、匈牙利古曲に、ピアノソロに、或は管絃楽〔オオケストラ〕の高き調にゆき、銀笛を吹き、道化た面して弄玩品〔おもちゃ〕の鉄琴をもうちたたけ。さうして時々古い一絃の古琴のうへに疲れたる汝の柔軟〔しなや〕かな白い手をさしのべよ。遊び尽くした小鳥の日暮れて古巢の梢にかへるやうに、日光と快樂とに倦んだ心のさみしい燈心草の陰影をもとめるやうに。

＊

古い小さい緑玉〔エメロウド〕は水晶の函に入れて刺戟の鋭い洋酒やハシツシュの罎のうしろにそつと秘蔵して置くべきものだ。古い一絃琴は仏蘭西わたりのピアノの傍の薄青い陰影のなかにたてかけて、おほかたは静かに眺め入るべきものである。私は短歌をそんな風に考へてゐる。

さうして真に愛してゐる。

＊

私の詩が色彩の強い印象派の油絵ならば私の歌はその裏面にかすかに動いてゐるテレビン油のしめりであらねばならぬ。その寂しい湿潤〔うるほひ〕が私のこころの小さい古宝玉の緑であり一絃琴の瀟洒な啜り泣である。

私の新しいデリケートな素朴でソフトな官能の余韻はこの古い本来の哀調の面目を傷けぬほどの弱さに常に顫へて居らねばならぬ。

而してしみじみと桐の花の哀亮をそへカステラの粉つばい触感を加へて見たいのである。

＊

単なる純情詩の時代は過ぎた。私らはシンプルな情緒そのものを素朴な古人のやうに詠歎することに最早や少からぬ不満足を感じる。赤子の如く凡てをフレッシュに感ずる心はまた品の高い文明人の渋いアートに醇化されねばならぬ。私は涙を惜しむ。何らの修飾なく声あげて泣く人の悲哀より一木一草の感覚にも静かに涙さしぐむ品格のゆかしさが一段と懐しいではないか。実際、思ふままのこころを挙げてうちつけに搔き口説くよりも、私

はじつと握りしめた指さきの微細な触感にやるせない片恋の思をしみじみと通はせたいのである。

鳴かぬ小鳥のさびしさ…………それは私の歌を作るときの唯一無二の気分である。私には鳴いてる小鳥のしらべよりもその小鳥をそそのかして鳴かしめるまでにいたる周囲のなんとなき空気の捉へがたい色やにほひがなつかしいのだ、さらにはまだ鳴きいでぬ小鳥鳴きやんだ小鳥の幽かな月光と草木の陰影のなかに、ほのかな遠くの櫛の花の甘い臭に刺戟されてじつと自分の悲哀を凝視めながら、細くて赤い嘴を顫してゐる気分が何に代へても哀ふかく感じられる。私は如何なるものにも風情ある空気の微動が欲しい。そのなかに桐の花の色もちらつかせ、カステラの手さはりも匂はせたいのである。

＊

私の歌にも欲するところは気分である、陰影である、なつかしい情調の吐息である。…
…

(小さい藍色の毛虫が黄色な花粉にまみれて冷めたい垂鉛のベンチに匍つてゐる………)

私は歌を愛してゐる。さうしてその淡緑色の小さい毛虫のやうにしみじみと私の氣分にまみれて、拙いながら真に感じた自分の歌を作つてゆく………

＊

五月が過ぎ、六月が来て私らの皮膚に柔軟〔やはら〕かなネルのにほひがやや熱く感じられるころとなれば、西洋料理店〔レストラン〕の白いテエブルクロスの上にも紫の釣鐘草と苦い珈琲の時季が来る。

私はこのいつもの詩のやうになつた Essey を植物園の長い薄あかりのなかでいまやつと書き了へたところだ。

銀笛哀慕調

I 春

一

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外〔と〕の面〔も〕の草に日の入る夕

二

銀笛のごとも哀〔かな〕しく単調〔ひとふし〕に過ぎもゆきにし夢なりしかな
しみじみと物のあはれを知るほどの少女〔をとめ〕となりし君とわかれぬ

五

いやはてに鬱金〔うこん〕ざくらのかなしみのちりそめぬれば五月〔さつき〕はきたる
葉がくれに青き果〔み〕を見るかなしみか花ちりし日のわが思ひ出か

六

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顫ひそめし日

七

かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふひとの春のまなざし

君を見てびやうのやなぎ薫るとき胸〔むな〕さわぎをばおぼえそめにき

八

南風モウパツサンがをみな子のふくら脛〔はぎ〕吹くよき愁〔うれひ〕吹く

南風薔薇〔さうび〕ゆすれりあるかなく斑猫〔はんめやう〕飛びて死ぬる夕ぐれ

九

凋れゆく高き花の香身に染〔し〕みつ貧しき街〔まち〕の春の夜の月

寝てきけば春夜〔しゅんや〕のむせび泣くごとしスレート屋根に月の光れる

十一

ゆく春のなやみに堪へで

鶯も草にねむれり

たんぽぽに誰がさし置きし三〔み〕すぢほど日に光るなり春の三味線

十二

ゆく水に赤き日のさし水ぐるま春の川瀬〔かはせ〕にやまずめぐるも

白き犬水に飛び入るうつくしさ鳥鳴く鳥鳴く春の川瀬〔かはせ〕に

十三

一匙〔ひとさじ〕のココアのにはほひなつかしく訪〔おとな〕ふ身とは知らしたまはじ

黒輝の石の釦〔ぼたん〕をつまさぐりかたらふひまも物をこそおもへ
薄あかき爪のうるみにひとしづく落ちしミルクもなつかしと見ぬ
寂しき日赤き酒取りさりげなく強ひたまふにぞ涙ながれぬ

十四

あまりりす息もふかげに燃ゆるときふと唇〔くちびる〕はさしあてしかな
くれなるのにくき唇あまりりすつき放しつつ君をこそおもへ

十五

はるすぎてうらわかぐさのなやみよりもえいづるはなのあかきときめき
くさばなのあかきふかみにおさへあへぬくちづけのおとのたへがたきかな
わかきひのもののといきのそこここにあかきはなさくしづころなし
ゆふぐれのとりあつめたるもやのうちしづかにひとのなくねきこゆる

十六

浅草にて

ゆく春の喇叭の囃子〔はやし〕身にぞ染む造花〔つくりばな〕ちる雨の日の暮
ああ笛鳴る思ひいづるはパノ라마の巴里〔パリス〕の空の春の夜の月

十七

美しくき「夜」の横顔を見るごとく遠き街〔まち〕見て心ひかれぬ
薄暮〔たそがれ〕の水路〔すいろ〕に似たる心ありやはらかき夢のひとりながるる

十八

そぞろあるき煙草くゆらすつかのまも哀〔かな〕しからずやわかきラムボオ
けふもまた泣かまほしさに街〔まち〕にいで泣かまほしさに街よりかへる

やはらかきかなしみきたるジンの酒とりてふくめばかなしみきたる
ナイフとりフオクとる間〔ま〕もやはらかに涙ながれしわれならなくに
にほやかに女の独唱〔ソロ〕の沈みゆくこちになし春も暮るれば
ウイスキーの強くかなしき口あたりそれにも優〔ま〕して春の暮れゆく

十九

夜会のあと

かくまでも心のこるはなにならむ紅〔あか〕き薔薇〔さうび〕か酒かそなたか

二十

春日笛のごとし

すずろかにクラリネットの鳴りやまぬ日の夕ぐれとなりにけるかな
にほやかにトロンボーンの音は鳴りぬ君と歩みしあとの思ひ出

Ⅱ 夏

郷里柳河に帰りてうたへる歌

一

廃れたる園に踏み入りたんぽぼの白きを踏めば春たけにける

二

夕暮はヘリオトロウプ、

そことなく南かせふく

やはらかに髪かきわけてふりそそぐ香料のごと滲〔し〕みるゆめかも

三

哀調一首

きりはたりはたりちやうちやう血の色の棺衣 [かけぎ] 織るとか悲しき機 [はた] よ

四

ロンドンの悲しき言葉耳にあり花赤ければ命短し

いと高き君がよき名ぞ忍ばるる赤きロンドン赤きロンドン

狂ほしく髪かきむしり昼ひねもすロンドンの紅 [べに] をひとり凝視 [みつ] むる

縫針 [ぬひはり] の娘たれかれおとなしくロンドンの花を踏みて帰るも

ロンドンは松葉牡丹の柳河語なり

五

枇杷の木に黄なる枇杷の実かがやくとわれ驚きて飛びくつがへる

枇杷の実をかるくおとせば吾弟〔わおと〕らが麦藁帽にうけてけるかな

六

ケエツグリのあたまに火の点〔ち〕いた、潜〔す〕うんだら消えた

吾弟〔わおと〕らは鳩〔にほ〕のよき巣をかなしむと夕かたまけてさやぎいでつも

六

Gonshan, Gonshan, 何処へいた、

きのふ札所〔ふだしよ〕の巡礼に

馬鈴薯の花咲き穂麦あからみぬあひびきのごと岡をのぼれば

黒鷯〔くろつぐみ〕野辺にさへづり唐辛子〔たうがらし〕いまし花さく君はいづこに

燕〔つばさ〕コツキリコ、畦道〔あぜみち〕やギリコ

病める児はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし畑〔ばた〕の黄なる月の出

Ⅲ 秋

一

日の光金糸雀〔カナリヤ〕のごとく顫ふとき硝子に凭〔よ〕れば人のこひしき

二

啄木鳥〔きつつき〕の木つつき了〔を〕へて去りし時黄なる夕日に音〔ね〕を絶ちしとき
雲あかく日の入る夕木々〔きぎ〕の実の吐息にうもれ鳴く鳥もあり

三

あかあかと五重の塔に入日さしかたかげの闇をちやるめらのゆく
かかる時地獄を思ふ、君去りて雲あかき野辺に煙渦まく

IV 冬

一

十一月北国の旅にて三首

葦崎の白きペンキの駅標に薄日のしみて光るさみしさ

柿の赤き実、旅の男が気まぐれに泣きて去 [い] にきと人に語るな

たはれめが青き眼鏡のうしろより朝の曇を透かすまなざし

二

久留米旅情の歌

日も暮れて櫓 [はじ] の実採 [とり] のかへるころ廓 [くるわ] の裏をゆけばかなしき

三

猫やなぎ薄紫に光りつつ暮れゆく人はしづかにあゆむ

水面〔みのも〕ゆく櫂のしづくよ雪あかり漕げば河風身に染みわたる

四

雪のふる夜昔ながらの蠟燭の裸火にうつ

し出されし団蔵の仁木の凄さよ

わが友は仁木の顔に面〔つら〕あかりさしつけながら花道をゆく

初夏晚春

I 公園のひととき

一

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ

二

山羊〔やぎ〕の乳と山椒のしめりまじりたるそよ風吹いて夏は来りぬ
指さきのあるかなきかの青き傷〔きず〕それにも夏は染〔し〕みて光りぬ

三

草わかば黄なる小犬の飛び跳〔は〕ねて走り去りけり微風〔そよかぜ〕の中
草わかば踏めば身も世も黄に染〔し〕みぬ西洋辛子〔からし〕の粉〔こな〕を花はふり撒
〔ま〕く

こころもち黄なる花粉のこぼれたる薄地のセルのなで肩のひと

草に寝ころべ、草に寝ころべ

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝 [ね] て削るなり

四

夕されば棕櫚の花ぶさ黄に光る公園の外 [そと] に座る琴弾者 [ことひき]

Ⅱ 郊 外

一

田舎家〔ゐなかや〕に中風病みのわが小父〔をぢ〕が赤き花見る春の夕暮

二

きさくなる蜜蜂飼養者〔みつばちかひ〕が赤帯の露西亜の地主〔ぢぬし〕に似たる初夏

あまつさへ赤き花ちり小馬嘶〔な〕く農家の白日〔ひる〕になげき入りぬる

三

ほそぼそと出臍〔でべそ〕の小児〔こども〕笛を吹く紫蘇の畑の春のゆふぐれ

太葱〔ふとねぎ〕の一茎ごとに蜻蛉〔とんぼ〕ゐてなにか恐るるあかき夕暮

Ⅲ 庭園の食卓

青き果のかげにわれらが食卓をしつらへよ、

春を惜むわかき日のころよ

一

あひびきの朝な夕なにちりそめし鬱金〔うこん〕ざくらの花ならなくに

二

サラダとり白きソースをかけてましさみしき春の思ひ出のため

さくらんぼいまださ青に光るこそ悲しかりけれ花ちりしのち

三

青き果〔み〕のかげに椅子よせ春の日を友と惜めば薄雲のゆく

酒注〔つ〕 げば黄なる薄雲桐の木の間に見えて夏は来にけり

四

かなしげに春の小鳥も啼き過ぎぬ赤きセエリーを君と鳴らさむ

燕〔つばめ〕、燕、春のセエリーのいと赤きさくらんぼ啣〔くは〕へ飛びさりにけり

五

ああ五月〔さつき〕 螢匍ひいでチキタリス小〔ち〕 さき鈴ふるたましひの泣く

金口〔きんぐち〕の露西亜煙草のけむりよりなほゆるやかに燃ゆるわが恋

六

やはらかに誰が喫〔の〕 みさしし珈琲〔コオヒイ〕ぞ紫の吐息ゆるくのぼれる

よき椅子〔いす〕に黒き猫さへ来てなげく初夏晩春の濃きココアかな

七

蟾蜍が出て来た、皆で寄つてたかつて胡椒をふりかけたり、

スープを飲ませたりした

しろがねの小さき匙もて蟾蜍〔ひきがへる〕スープ啜るもさみしきのため

八

干葡萄ひとり摘み取りかみくたく食後のほどをおもひさびしむ

カステラの黄なるやはらみ新らしき味ひもよし春の暮れゆく

九

昼餐〔ひるげ〕 ときはてしさびしさ春の日も紅茶のいろに沈みそめつつ

まひる野の玉葱の花紫蘇の花かろく哀〔かな〕 しみ君とわかるる

IV 春の名残

一

一九一〇 暮春三崎の海辺にて

いつしかに春の名残となりにけり昆布干場〔こんぶほしば〕のたんぽぽの花
寝てよめば黄なる粉〔こな〕つく小さき字のロチイなつかしたんぽぽの花

春愁極りなし

野薊に触〔さは〕れば指〔おゆび〕やや痛〔いた〕し汐見てあればすこし眼いたし

二

洋妾〔らしやめん〕の長き湯浴〔ゆあみ〕をかいま見る黄なる戸外〔とのも〕の燕〔つば
くら〕のむれ

ふはふはとたんぽぽの飛びあかあかと夕日の光り人の歩める

三

乳のみ児の肌のさはりか三〔さん〕の絃〔いと〕なするひびきか春のくれゆく

魔法つかひ鈴振花〔すずふりばな〕の内部〔なか〕に泣く心地こそすれ春の日はゆく

四

「春」はまたとんぼがへりをする児らの悲しき頬のみ見つつかへるや

昼の思

六月が来た、なつかしい紫のチキタリスと苦い珈琲の時節、赤い土耳古帽の螢が萎え、憂鬱な心の蟾蜍〔かへろ〕がかやつり草の陰影〔かげ〕から啼き出す季節――而してやや蒸し暑くなつたセルのきものの肌触りさへまだ何となく棄て難い今日此頃の気惰〔けだ〕るい快さに、ふつくらと軽いソファに身を投げかけて、物憂げに煙草をくゆらし、女を思ひ、温かい吐息と、真昼マグネシヤの幻光の中に幽かな黄昏の思想を慕ひ恍惚の薄明〔ツワイライト〕を待つわかい男の心ほど悩ましいものはあるまい。

零時二十三分、日の光はヴェニス模様の色硝子を透かして窓掛の浮織を悩まし、人も居ない珈琲店の空椅子には、今恰度真白な猫がまるで乳酪の塊〔かたまり〕のやうにとろみかけてゐる。而して誰が喫〔の〕みさしたのか、眩ばゆい食卓の一角から軟〔やは〕らかな珈琲の吐息がたちのぼる。

珈琲、珈琲、ひとりでにわれとわが心の匂を温め乍ら、やはらかな紫のいろにたちのぼるその吐息、病ましい物思の何とも捉へどころのないやうなその香煙の縋れを、懶怠〔なまけ〕た身の起伏〔おきふし〕に何といふこともなく眺めやる昼の男の心持、また逃げてゆく「時」のうしろでをも恍惚〔うつとり〕と空に凝視〔みつ〕むる心持……

ゴッホの狂はしい外光の痛さ、ゴウガンの粗〔あら〕い生そのものの調色、或はマチスやピガソ、物を角に見るキュビストの新しい神経の触覚よりもかういふ日の疎〔うと〕ましい懶怠〔なまけ〕ものの心にはあのルノワールなどのふくよかな色の温味と悩ましい息づかひの魅力、さうしたものの美しさがどれだけ豊醇な親しさと懐かしさとおぼえさせてくれるか知れない。

珈琲の煙はまだ消えもやらずにたちのぼる。やや疲れたらしいやうなロオデンバツハの物おもひ、美しい宝石商人の溜息、ボオドレエルの苦笑ひ、或はレニエ、サマンの曇りと優しみ、それらを一つにしてたちのぼるわが珈琲の匂の強さ、なつかしさ、心もとなさ、苛々〔いらいら〕しさ……何よりも芸術の粹を慕ふ私の心は渾然としたその悲念の溶〔と

ろ] ましさに訳 [わけ] もなく苛 [いぢ] められ、魅せられ、ひき包まれ、はたまた泣かされる。さてはあの怪しい沈黙の秒刻に譬へやうもない靈魂の歔歔 [すゝりなさ] をかりそめにも聴き逃さなかつたヴェルレエヌの純一な気分も恰度デリケエトなかういふ心持では無かつたか。

珈琲の煙はとりもなはず心の言葉である。匂である。色であり音楽である。而して渋くて苦い珈琲末は心の心、靈魂の生地 [きぢ]。匙は感覚。凡て溶かして掻き廻す觀相の余裕 [ゆとり] から初めてとりあつめた哀樂のかげひなたが軟かな思の吐息となつてたちのぼる。もの思はしい中に限りもない色と香の諸相をひき包んで六月の光線に美しい媚のあや糸を縫 [もつ] らす苦い珈琲の風味は決して自己 [われ] を忘れたロマンチックな空の幻でも單純な甘いセンチメントの欺きでもない。眞実、珈琲から珈琲の煙が立つやうに内心の深みから素直に心の吐息を掻き立たせてその融合渾沌のさかひに怪しい芸術の衿持と魔力とを物静かに薫らし得る純一な詩人の歡会はまた何にもかへがたい眞言秘密の妙諦である。世に天才の名を恣にする人達の間にも眞にわが靈の匂を知り、言葉のかげひなた、

ものの媚、色あひ、幽かな色触香響の末の末まで嗅ぎわけて常に怪しい悲念にかき暮れ得る高貴な心の所有者〔もちぬし〕は極めて少い。況して世のつねのかいなでびとが心をや。芸苑の申にしてなほ荒削りの珈琲末を悦び、但しは心と言葉の距離徒に遠くしてそのみなもとの苦き香気を忘れたつやもない思想家と偽りものの工人の世には多さよ。

珈琲、珈琲、珈琲の煙はまだ冷〔さ〕めもやらずにたちのぼる。紫いろの息づかひ、ロダンの線画……

乳酪の猫がまだ夢みるやうにその光つた尻尾〔しつぽ〕の尖の細かな緑色の痙攣を凝視〔みつ〕めてゐる。窖〔あなぐら〕のやうな入口からくわつと明るい銀座の通が見える、白日の輝き、濡れた舗石、柳の葉、そのかげの赤い草花の鉢、寄せかけた自転車の銀の輪……

日に見えぬ空の何処〔どつ〕かで花火が揚る。

そのうちにやや陰影の曇りを煙らした室内の光に懶怠〔なま〕けはてた私の物思が今はもう珈琲の匂にさへ堪へがたいはどの疲れをおぼえる。而してただそこはかたなくアンダ

ンテの夢の調子に堕ちてゆく。

私は思ふ、男をんなの真の中夜の秘戯〔たはむれ〕をかういふ昼の悩ましさにかろく描きつづけてゐた歌麿の気持、まだ暮れもやらぬ昼の舞台に黄色いラムプを点〔とも〕す若い女形〔をやま〕の心持、白芥子の花に纏〔まっは〕る昼の幽霊、投げやりな昼間の三味線、湯上りの肌に匂ふあかい石竹、而して白日の光にうち揚ぐる夜の花火の紅緑・輩翠・土耳其玉・銀光の紫……目に見えぬ星と宝玉の一悲劇、眩耀と消滅の夢。

而してまた公園の昼のアーク燈を、白昼のシネマトグラフの瞬き、或は薄い面紗のかけに仄かに霞む人妻の愁はしい春の素顔を。

総じて明るい中の物の瞬き、幽愁の燐〔いぶ〕し、疲労と陰影の薄笑ひ、眩暈中の杏仁水、それらから来る寂しさ、悲しさ、なつかしさ、さうした優しさ果敢なさ溶〔とろ〕ましさが私にはあの悲み極まつた純情の嗚咽、あらゆる観念の寂び、綺羅を鏤めた美しい夜の横顔、或はサロメ女王の驕奢を尽した踊の手さばきよりも却て染々とした歎息の推移〔うつりかはり〕を感じしめる。

涙を惜め、涙を惜め、高品なわかい心のそこひもわかぬ胸の秘奥に啜り泣けよ。芭蕉の
寂びはまだうら若い私達が落ちつくところではない、少くとも世を楽しむメエテルリンク
の悲愁〔かなしみ〕と神秘〔ミスチツク〕な蒼い陰影の靄の中に寂しい心の在所〔ありか〕
を探す物馴れぬ Stranger の心持、その心を私は慕ふ。

乳酪の白い猫が幽かに鼾をかきはじめた。その時私も静かに女を呼んで一杯のウオツカ
を求める。この昼の暑さに無色透明なウオツカが小さなりキユグラスを透かして冷〔つめ〕
たい漣を立てる。その投影がまたプリズムのやうに、頁を開いてあるモウパッサン集の黒
い活字に細々〔こまごま〕と果敢ない染色をちらつかす。

ふと点の赤い i の字がひとつ眼につく。それが物憂げに動いて上の行の Chambre の b
の字に匍ひ出し、しんみりと蒼い光を立てて斜めに Les enfants の L を横ぎり、もひ
とつ上の行の Passion の P に喰ひつくやうに留まつた。螢だ、疲れた小さな螢、点の
赤い i の字、その尻を抓むと力のない人霊色の燐光が怪しい湿润〔しめり〕を放つ。私は

何時しか若い少年の日の心に歌った「おもひで」のあの螢の一聯を思ひ出した。

そなたの首は骨牌〔トランプ〕の

赤いチャツグの帽子かな、

光るともなきその尻は、

感冒〔かぜ〕のこちにほの青し、

しをれはてたる幽霊か。

透き徹つたウオツカと螢の赤い点、その冷たさ悩ましさ、私は染々と昼の螢に執着する。

而してその銀の燵〔いぶ〕しをかけた蒼白い哀傷の光を愛する。

業平の高い調〔しらべ〕はまさに感じ易い夜の螢のセンチメントである。私達は時としてその繊細な平安朝の詠嘆、乃至は純情の雅びやかなる啜り泣き、若くは都鳥の哀怨調に同じ麗らかな心の共鳴を見出す事はある、而しなほ苦い近代の芸術にはまだその上に堪へがたいセンジュアルな日光の触覚と渋い神経の瞬きとを必要とする。鏤銀の昼の燵しを必要とする。さもなくばアーク燈の眩ぶしい光のかげにあるかなきかに飛ぶ夜の螢の燐光を

闇の夜のそれよりも更に哀れぶかくやるせないものに感じなければならないのである。

午後二時過ぎ、螢はいつのまにか珈琲碗のかげにかくれて白い頁の Passion の P の字の
みが強く強く光り出した。

乳酪の白描がまだ睡つてゐる。昼寝から覚めた料理人が今また青い甘藍の球でも撈ぎと
るのか厨の方で新しい野菜のにはひがすすろぐ。さうして水道栓の水の滴り、誰かしら吹
き鳴らす昼の銀笛……

私の気まぐれな聯想はまた鮮な郊外の景色に手を振つてゆく郵便脚夫の白い帽子に飛ん
でゆく。ゴツホの野外の景色、段々畑の銀緑色に雨の霽れ間の郭公が啼き叫び、白い葱の
花のかげから出臍の兒が裸のままで笛を吹く……

凡ての因襲から放れ、馴れ過ぎた官能の愛着を断ちきり、而して更に新しい驚異の鋭感
にやるせなきわれ自らの霊〔たましい〕を慄かす近代の心にもなほありしそのままの声音
に郭公は啼き、寂しい日本の笛は鳴る。ただ感ずる詩人の触覚と、周囲の気分の如何に依

て古くも珍らしくも聴き倣されるのである。

笛は鳴る、夜の笛より昼の音色のわびしさを、公卿の物の哀れよりも弥さらに病児の温かいその吐息を、私の神経は悲しむ、而して葱のあたまとに縋るる白い羽蟲のやうに羽ばたく。

笛の音は何時の世までも滅びない、日本の笛の哀れさも何時の如何なる人の心にも染み込んでゆく。その笛本来の幽かな弱い寂しさは誰しもの胸の中に生れながらに秘められた純情のなげきである。高貴な内心の啜り泣き、やがては奔放限りなき管絃楽のそのみなもとである。

そのみなもとを悲しめ、而して至醇なそのみなもとの歌の気稟をかりそめにも傷くるな、笛の句を知れ、完成された大和歌の心根に更に悲しい銀光の燐しをかけよ。ただ懐かしいその笛に強ひては残虐な煤煙の濁りと工場の鉄の響を吹きかけるな。

私はただ馴れ過ぎた俗人「プルジオ」の詠歎を忌む。されば日本の笛を取る心もちにもなほ鮮かな Stranger の驚異と感触を貴み、目白僧園の鐘の音にアベマリヤの晩鐘を忍ぶ以

太利亜旅人の春愁を悟り、異国の菊の香〔かをり〕に新しい流離の涙をそそぐピエルロチが秋の心をまたとなく懐かしむ。私はまた梅の木に鳴く鶯よりも脳病院の窓に鳴く鶯に泣き、定斎の軋みに驚く鶯に連れて驚く。有明の月に血を吐くほととぎすの悲歎を曾て見知らぬ私は寧ろキャベツ畑の雨に啼く郭公を楽しいものに哀れみ、昔ながらの古い前栽の繁みに飛ぶ螢よりも客待の人力車のかげに仄かに蒼白いお尻のバツチを光らす東京の螢をこの上なく今の心に親しむ。さりながら凡ての因襲から逃れて常に新しい官能の薄明りにわれとわが霊の在所〔ありか〕をたづねゆくわかい旅人の心にも思ひ棄てがたきは日本の笛のあはれである。哀みのそのみなもと、純情のかの吐息である。

時が経つた。いつしか黄ばみかけた日の光のもとに、薄青いクローバ模様の壁にかけた玩具の木時計が可笑〔をか〕しさうにお尻の分銅を動かし乍ら今三時を点つ。而して驚かされた乳酪の塊〔かたまり〕が椅子の上からすべり下り、料理人〔コック〕が細かに玉葱の庖丁を刻み、懶〔なま〕けたソファの物思が軟かに温かい欠伸をつく。

くわつとした入口の外の明るさ、自転車が去り、草花の赤い鉢に静かに煉瓦屋根の投影が軽い塵埃〔ほこり〕と縫れる。

Cuckoo,jug-jug,pu-we,to-witta-woo!

Gristchen,gristchen,tutch,tutch,tutch!

鳥屋が通る、くわつと明るい人道を車を曳いて。

Cuckoo,jug-jug,pu-we,to-witta-woo!

車の上の円い四角な金網作りの、或は竹製の、大小さまざまの鳥籠、その鳥籠が六月の日に揺られながら蒸しかへるやうに光つてゆく。

Cuckoo,jug-jug,pu-we,to-witta-woo!

Gristchen,gristchen,tutch,tutch,tutch!

薄明の時

I 放 埒

一

美しくしかなしき痛き放埒の薄らあかりに堪へぬころか

二

ものづかれそのやはらかき青縞のふらんねるきてなげくわが恋

わがゆめはおいらん草〔さう〕の香のごとし雨ふれば濡れ風吹けばちる

三

鳴きしきるは葦きり、舌うつは海、さるに

もせんなや、夜の明けがたのつれびき

アーク燈点〔とも〕れるかげをあるかなし螢の飛ぶはあはれなるかな

四

なんぼ恋には身が細ろ、

ふたへの帯が三重まはる

なにとなく軍鶏 [しやも] の暗く夜の月あかりいぶかしみつつ立てる女か

五

博多帯しめ、筑前しほり、筑前博多の

帯しめて、あゆむ姿は柳腰……………

すつきりと筑前博多の帯をしめ忍び来し夜の白ゆりの花

六

ぬば玉の銀杏がへしの君がたば美しくし黒し蓮の花さく

七

ある遊女の部屋に、薄い硝子の水盤があつた、

夏の夕方、夜のひきあけ、ひけすぎの薄いあか

りにほのかにウオタアヒヤシンスの花が咲

いてはまた萎れてゆくのであつた

水盤の水にひたれるヒヤシンスほのかに咲きて物思はする

八

フラスコに青きリキュールさしよせて寝〔ぬ〕ればよしなや月さしにけり

二上りの宵のながしをききしよりすて身のわれとなりにけむかも

九

毒草なれどもその花かすかに、

光あれどもその色さびし

雪の下白く小〔ちひ〕さく咲きにけり喜蝶が部屋の箱庭〔はこには〕の山

十

わかき身の感じ易さよ硝子杯〔さかづき〕の薄き罇〔ひび〕にも心染〔し〕みつつ

顫へ易く傷つき易き心あり薄らあかりにちる花もあり

十一

鳥よ、鳥よ、宿場の小鳥、

広重の海に飛べよ

木の枝に青き小鳥のとまりゐてただほれぼれと鳴ける品川

十二

年増のなげき一首

玉蟲の一羽〔ひとは〕光りて飛びゆけるその空ながめをんな寝そべる

Ⅱ 踊 子

一

悩ましく廻〔まは〕り梯子〔はしご〕をくだりゆく春の夕の踊子がむれ

二

やるせなき春のワルツの舞すがた哀〔かな〕しくるほし君の踊〔をど〕れる

美しくきさいへかなしく愚かしき疲〔つか〕れつくと踊子踊る

紫のいたましきまで一人〔ひとり〕踊るスカートの陰影〔かげ〕に春はくれゆく

ただ飛び跳〔は〕ね踊れ踊子現身〔うつそみ〕の杳〔くつ〕のつまさき春暮れむとす

三

たらんてら踊りつくして疲れ伏す深むらさきのびろうどの椅子

あでやかに踊りつかれしさみしさか寝椅子に人を待てるころか

四

くろんぼが泣かむばかりに飛び跳 [は] ぬる尻ふり踊にしくものはなし

Ⅲ 浅き浮名

一

恋すてふ浅き浮名もかにかくに立てばなつかし白芥子の花

二

薄青きセルの単衣〔ひとへ〕をつけそめしそのころのごとなつかしきひと
片恋のわれかな身かなやはらかにネルは着れども物おもへども

三

茴香さく

わが世さびし身丈〔みたけ〕おなじき茴香〔うゐきやう〕も薄黄に花の咲きそめにけり
茴香の花の中ゆき君の泣くかはたれどきのここちこそすれ

四

白き藤椅子をふたつよせてものおもふ

ひとのおだやかさよ。読みさせるはアル

ベエル・サマンにや、やはらかに物優しき

夕なりけり

さしむかひ二人〔ふたり〕暮れゆく夏の日のかはたれの空に桐の匂へる

五

潮来出島の真菰の中にあやめ

咲くとはしほらしや

かきつばた男ならずばたをやかにひとり身投げて死なましものを

六

たんだ振れふれ六尺袖を

桐の花ことにかはゆき半玉の泣かまほしさにあゆむ雨かな

七

すずかけの木とあかしやとあかしやの

木とすずかけと舗石みちのうす霧に

ほのぼのと人をたづねてゆく朝はあかしやの木にふる雨もがな

IV 蟾蜍の時

一

螢飛び蟾蜍〔かへろ〕啼くなりおづおづと忍び逢ふ夜の薄霧の中

二

蟾蜍〔ひきがへる〕幽霊のごと啼けるあり人よほのかに歩みかへさめ

ゆくりなくかかるなげきをきくものか月蒼ざめて西よりのぼる

三

鳥羽玉〔ぬばたま〕の夜のみそかごと悲しむと密〔ひそ〕かに墓〔ひき〕も啼けるならじ
か

宝玉のこよなき心とり落しよきひと泣けば墓〔ひき〕もまた啼く

四

いかばかり麻の畑の青き葉の身には染〔し〕むらむ人妻の泣く

人知れず忍ぶ心は烏羽玉〔ぬばたま〕の黒き夜のごとかがやきいでぬ

V 猫と河豚と

一

青柿のかの柿の木に小夜ふけて白き猫ゐるひもじきかもよ

二

白き猫膝に抱けばわがおもひ音なく暮れて病むこちする

白き猫泣かむばかりに春ゆくと締 [し] めつゆるめつ物をこそおもへ

三

弓矢八幡寝はせねど、寝たと

おしやらばなとせうぞの

夜おそくかけしふすまに匍ひのぼる黒きけもののけはひこそすれ

四

乳緑 [にゆうりよく] のびろうどの河豚 [ふぐ] 責めふくらし昨日 [きのふ] も男涙なが
しき

河豚 [ふぐ] よ河豚 [ふぐ] よ汝 [なれ] は愚かし地に跳 [は] ねて沖津玉藻の香のなげ
きする

Ⅵ 路 上

春

いそいそと広告燈も廻るなり春のみやこのあひびきの時

夏

白耳義新詩人のものなやみは静かにし

てあたたかく、芭蕉の寂はほのかに涼し

かはたれのロウデンバツハ芥子の花ほのかに過ぎし夏はなつかし

水 路

空見れば円弧燈〔アークライト〕に雪のごと羽虫たかれり春よいつこに

薄暮〔かはたれ〕の水路〔すいろ〕にうつるむらさきの弧燈〔こたう〕の春の愁なるらむ

新 橋

新らしき匂なによりいとかなし勸工場のぞく五月のころ

人力車〔じんりき〕の提灯点〔かんばんつ〕けて客待つとならぶ河辺に螢飛びいづ

銀 座

薄あかり紅〔あか〕きダリヤを襟にさし絹帽〔シルクハット〕の老いかがみゆく

夏よ夏よ鳳仙花ちらし走りゆく人力車夫にしばしかがやけ

おそ夏

折ふしのものの流行〔はやり〕のなつかしくかなしければぞ夏もいぬめる

両 国

万歡夢のごとし

青玉のしだれ花火のちりかかり消ゆる路上を君よいそがむ

初 秋

夏の夜の牡丹燈籠の薄あかり新三郎を誰か殺せる

ちりからと硝子問屋の燈籠の塵埃〔ほこり〕うごかし秋風の吹く

雨のあとさき

I 雨のあとさき

一

新らしき野菜畑のほととぎす背広着て啼け雨の霽〔は〕れ間〔ま〕を
キャベツの段々畑〔だんだんばたけ〕銀緑なり雨霽れ空に白雲の湧く
あまつさへキャベツかがやく畑遠く郵便脚夫疲れくる見ゆ

二

入日うくるだらだら坂のなかほどの釣鐘草の黄なるかがやき
窓ぎはの男の頬のみ明〔あか〕う見せ釣鐘草の中を汽車ゆく

三

酒場の夏

夏帽子瀟洒につけて身をやつす若き紳士の白百合の花

四

夏の日になつかしきかなころよく梔子〔くちなし〕の花の汗もちてちる
きりぎりすよき淫〔たは〕れ女〔め〕がひとり寝て氷食む日となりけるかな

五

やるせなき淫〔みだ〕ら心となりにけり棕櫚の花咲き身さへ肥満〔ふと〕れば
黒き猫夜は狂はしくかきいだき五月蠅〔うるさ〕きものに昼は跳〔は〕ねやる

六

桐の花ちるころ

人妻のすこし汗ばみ乳をしぼる硝子杯〔コップ〕のふちのなつかしきかな

七

梅雨くるまへ

栗の花四十路過ぎたる髪結の日暮はいかにさびしかるらむ

八

あかしやの花ふり落す月は来ぬ東京の雨わたくしの雨

検温器〔けんおんき〕かけてさみしく涙ぐむ薄き肌あり梅雨〔つゆ〕尽きずふる

二階より桐の青き葉見てありぬ雨ふる街〔まち〕の四十路〔よそぢ〕の女

七月やおかめ鸚哥〔いんこ〕の啼き叫ぶ妾宅の屋根の草に雨ふる

九

色硝子暮れてなまめく町の湯の窓の下〔もと〕なるどくだみの花

湯上りの好〔す〕いた娘がふくよかに足の爪剪〔き〕る石竹の花

十

長雨〔ながさめ〕の蒼くさみしく淫〔たは〕れてしその日かの日もいまは恋しき

長雨のあとのところにひるがへり孔雀火のごと鳴く日きたりぬ

十一

新らしき皮膚の痛〔いた〕みかたましひの心〔しん〕の汗より来るなげきか

たもちがたきところところ薄ら青き蝗のごとく弾ねてなげくや

十二

憎きは女、恋しきもまた女

憎悪〔にくしみ〕のころ夏より秋にかけ茴香の花の咲くもあはれや

十三

昼見えぬ星のころよなつかしく刈りし穂に凭り人もねむりぬ
あかあかと驚〔あひる〕卵を置いてゆく草場のかげの夏の日の恋

十四

夏の日には女役者のものごしのなまめかしさに似てさびしけれ
紫の日傘さしかけ憂〔う〕き人ののらりしやらりと歩む夕ぐれ

十五

やはらかに夏のおもひも老いゆきぬ中年の日の君がまなざし

Ⅱ 昼の鈴虫

明治四十四年の夏、蠣殻町の岩佐病院にて

そ の 日

なつかしき七月二日〔ふつか〕しみじみとメスのわが背〔せ〕に触れしその夏

麻酔のまへ

麻酔の前鈴虫鳴けり窓辺には紅く小〔ちひ〕さき朝顔のさく

麻酔の時

夏はさびしコロロホルムに痺〔しび〕れゆくわがころにも啼ける鈴虫

朝顔を紅〔あか〕く小さしと見つるいのち消えむとぞする鳴け鳴け鈴虫

麻醉のあと

燕 [つばめ]、燕 [つばめ]、昼の麻醉のさめがたに宙がへりして暗くはさびしも

午前午後

気のふれし女寡婦 [をんなやもめ] のいと蒼くしまりなき眸 [め] に朝顔のさく
創 [きず] いたしかなし鋭しまたさびし狂人 [きちがひ] の部屋に啼ける鈴虫

夕ぐれ

ほのかなる水くだもののにほひにもかなしや心疲れむとする
さしのぞけば向ふの寄席 [よせ] に人形の治兵衛踊れりなんとせうぞの

宵のくち

なにおもふわかき看護婦夏過ぎて雨夜 [あまよ] の空に花火あがれる

宵のくちそれもひととき看護婦のはるもにか吹く夏もひととき

立 秋

退院の前の日

長廊下いろ薄黄なる水葉の瓶ひとつ持ち秋は来にけり

秋思五章

I 秋のおとづれ

一

松脂のにはほひのごとく新らしくなげく心に秋はきたりぬ

二

薄らかに紅く孱弱〔かよわ〕し鳳仙花人力車〔じんりき〕の輪にちるはいそがし
鳳仙花うまれて啼ける犬ころの薄き皮膚より秋立ちにけり

三

秋の空酒を顰〔しか〕めて飲む人の青き額〔ひたひ〕に顫ひそめぬる
眼のふかく昼も臆する男あり光れる秋をちつと凝視〔みつ〕むる

四

鏽銀 [しやうぎん] の蠅取蜘蛛をまつ活かし秋はさやかに光りそめぬる
君がピンするどに青き虫を刺すその冷 [つめ] たさを昼も感ずる

五

かかる日の胸のいたみのしくしくと空に光りて雨ふるらむか
しづやかに光の雨のふりそそぐ昼の心に蒼ざめてあり

Ⅱ 秋 思

一

クリスチナ・ロセチが頭巾かぶせまし秋のはじめの母の横顔

二

食堂の黄なる硝子をさしのぞく山羊〔やぎ〕の眼のごと秋はなつかし

三

秋の草白き石鹼〔しゃぼん〕の泡つぶのけはひ幽かに花つけてけり

人形の秋の素肌となりぬべき白き菊こそ哀〔かな〕しかりけれ

四

旅に来て船がかりする思あり宝石商の霧の夜の月

五

みすずかる信濃か日本アルプスか空のあなたに雪の光れる

静かなる秋のけはひのつかれより桜の霜葉ちりそめにけむ

Ⅲ 清 元

一

清元の新らしき撥君が撥あまりに冴えて痛き夜は来ぬ

二

手の指をそろへてつよくそりかへす薄らあかりのもののつれづれ

ひいやりと剃刀〔かみそり〕ひとつ落ちてあり鶏頭の花黄なる庭さき

三

微〔かす〕かにも光る蟲あり三味線の弾きすてられしこまのほとりに

蟋蟀〔いとど〕ならばひとり鳴きてもありぬべしひとり鳴きても夜は明けぬべし

四

円喬のするりと羽織すべらするかろき手つきにこほろぎの鳴く

太棹〔ふとざほ〕のびんと鳴りたる手元より夜のかなしみや眼をあけにけむ

昇菊の絃のつよさよ

黒き猫しづかに歩みさりにけり昇菊の絃〔いと〕切れしたまゆら

きりきりと切れし二の絃〔いと〕つぎ合せ締むるころか秋のをはりに

五

歌舞伎座十月狂言所見

常盤津の連弾〔つれびき〕の撥いちやうに白く光りて夜のふけにけり

IV 百舌の高音

一

百舌啼けば紺の腹掛新らしきわかき大工も涙ながしぬ

二

いらいらと葱の畑をゆくときの心ぼそさや百舌啼きしきる

いつのまに刈り干しにけむ甘蔗黍〔さたうきび〕刈り干しにけむあはれ百舌啼く

三

とある池のほとりにて

水すまし夕日光ればしみじみと跳〔は〕ねてつるめり秋の水面〔みのも〕に

四

鶏頭の血のしたたれる厩〔うまや〕にも秋のあはれの見ゆる汽車みち
三月まへ穂麦のびたる畑なりきいま血のごとく鶏頭の咲く

五

柔かき光の中にあをあをと脚ふるはして啼く蟲もあり
かかれとて蟲の寡婦〔やもめ〕は啼かざらむ鴉細〔こま〕かに啄みにけり

六

武蔵野のだんだん畑の唐辛子いまあかあかと刈り干しにけれ
あかあかと胡椒刈り干せとめどなく涙ながるる胡椒刈り干せ
父親とその子の三次ひと目赤く胡椒刈り干せど物言はずけり
男子らは心しくしく壅畑〔きりばた〕の赤き胡椒を刈り干しつくす

V 街の晩秋

一

黄なる日に錆びし姿見鏡 [すがたみ] てりかへし人あらなくに百舌啼きしきる

二

秋の葉

いつのまに黄なる火となりちりにけむ青さいかちの小さき葉のゆめ

四

都大路いまだゆらげる椽 [とち] の葉に日向雨こそふりいでにけれ

午前八時すずかけの木のかげはしる電車の霜もなつかしきかな

五

あかしの金と赤とがちるぞえな、

やはらかな秋の光にちるぞえな

ただしづかに金〔きん〕のよき葉のちりかへりいかばかり秋はかなしかるらむ

六

わが友の黒く光れる瞳より恐ろしきなし秋ふけわたる

植物園小品

25. III.10.

午後三時過ぎ、

薄黄水仙の浅葱〔あさぎ〕の新芽枯れたる芝生のなかに仕切られたる円形或は長方形の花壇のなかに二寸ばかり萌えいづ。その幾何学的なる配列のつつましさよ、風微〔かす〕かにかよふ。

水噴かぬ鏽びたる噴水の露盤より静かに滴る水滴。

温室前の厚葉シユロランの高きそよぎ。キミガヨランの長きしだり葉に日は光り、南洋土人の頭飾の如くにうち動〔ゆら〕ぐ。

植物園事務室より出で来りし、若き紳士の紺の背広に赤皮の靴のやはらなる、薄黄水仙のほとりをぞゆく。

異国の人来る。男は萌黄のソフトをかぶり、女は褪紅の外套を着け、その後より鮮紅の帽かむりし二人の男女の小児爽やかに走りゆく。転づるは French か、角ぐみそめし桜の二列の並木の間の人道を、枯草の辺りを、青くして低きかなめ垣の長き径に添ひて、ハリ

エニシダの花黄なる彼方へとぞゆく。日は黄にして軟かく、冷めたけれども快〔こゝろ〕
よき春の風吹く。

とある枯れたる芝生の隅に整はぬ円形を作りあまたの迎春花〔ワウバイ〕の小さくして
色黄なる花葉もなき枯枝に咲けり、高さは人の足もとにうち見らる。

砂敷ける径のほとり沈丁の花冷めたき風に甘く鋭し。

少年二人カンワ` スを手にはさげて静心なく歩みゆく、濡れたる油絵具のにはほひ新し。

老緑色の小さき園標に記したる白き文字の淡青さよ。『このおくの下に庭あり。』

暗くして青きインバネスのマワシの下に冷めたく白き指のみ見せて黄なる蜜柑をむきつ
つ我はゆく……

枝ぶりよきサンシュユの花の小さくして黄なる数かぎりなき哀愁よ、四時過ぎの日光を
うけて風に戦げる。

人ごゑきこゆ、女のやさしき砂を踏む足音も……

色淡き、あるは華美〔はで〕なる羽織のちりめんのしとやかさよ、女の一人は淡青のり

ボンをぞ髪につけたる。

サンシユユと径を隔てて向へるツタウルシの木の小さき黄なる花、その枝に毛蟲の繭ひとつ透きて見ゆ。

遠き下町の夕とどろき、豆腐屋のラツパ、長く曳く小さき汽笛、鉄板の音。

小鳥ちろちろと鳴く。

湿〔しめ〕れる粉〔こな〕つぼくして赤みある黒き土のそこここに、枯れたる小草の淡き淡き乳黄色と、そのなかに萌えいでたる葱色〔ねぎいろ〕の草わかばの新しき配調を見よ。仏蘭西がへりの若紳士の軽く着〔つ〕けたる粋〔いき〕な背広のにほひする。

丁字形の白ペンキの二尺ばかりの立標に、W. C. と小さき横文字にて書きたる、そのつつましさに淡紫の花をすりつけて過ぎしは誰ぞ。

日の光は形円きトベラノキに遮られて空気冷〔ひや〕やかに風うすく匍ひくねれるサンザシに淡紅緑の芽は蕾み、そのもとに水仙の芽ぞ寸ばかり地を抽〔ぬ〕きてうち戦ぐ。とある小枝に寥しくして忙〔いそが〕しき小さき白粉色の蜘蛛のおこなひよ、その絲の色な

き戦慄……

銃〔つゝ〕の音〔おと〕一二発――

眼をあげよ、今、くわつと明〔あか〕りし二本の楠の梢を、サンシュユの黄なる花の光を、枯草の色を、淡青きヒヤシンスの芽のほひを。

そこらに声したる人もはや去りぬ。

鳥は園の周囲〔まはり〕に鳴き、園丁の鍬に掘〔ほ〕りかへさるる赤土のやはらかなるあるかなきかの湿潤〔しめり〕のなかのわかき新芽のほひよ、冷〔つ〕めたけれども力〔ちから〕り。

老緑色の足もとの小さき園標は日にそのさみしき半面をあてたる。その淡青き白き文字のかすかなる黄なる反射〔てりかへし〕よ。『園内の草は自生といへども摘み取るべからず』云云。

橡の枯木のもとに画架を立てたる青年画家は静物の硝子杯と皿と水さしと醋〔す〕ゆき

林檎とを描 [か] きくづしたる古カンワ` スの上に、まづ新しき樹の幹の White と Blue とを塗りはじめたる。すでに暑りそめたる夕日は彼の男の描けるサンシユユの黄なる枝の花に、そを見る齒痛の人の顔一面に巻きつけたる白き繻帯に、わがむく蜜柑の皮の黄橙色 [オレンジ] にさみしく光りつつあり。わが歩みは檜の日かげより丘のはづれの小亭へ、その傍 [かたはら] の径を下りて睡蓮科の生ひ涵 [ひた] れる小さき池のほとりへゆく。

日の光はここにて淡き黄緑となり、冷 [つめ] たくして透明なる水は薄らに顫へ、汚なるココア色の泥のなかに蠢めく蟲ありて、水草のかげに油すこし浮く。そのうへに八つ手のやはらかなる乳金色の花穂はこの小さな領内にうらわかき貴公子の如く佇めり。

三分ののち、われはまた広き他のほとりの老緑色のベンチに腰かく。園丁来りて踏板の上に並べほしたる靴ぬぎの汚 [よ] ごれたる毛をはたく、チョコレート の如き埃立つ。

ここをまた蜜柑むきつつ日かげを厭ひて我はゆく……

Tobaccos と白く抜ける煙草の赤き紙標見ゆ、敷島を買はんとて寥しき売店に入るほどの餓ゑたる心と、ひとりあるきのなにとはなき哀愁に、日も暮れんとするさみしさよ。

また小亭のベンチの老緑色のつつましきまでのなつかしさに一人〔ひとり〕ゆきて休憩〔やす〕みたる十分ほどの静けさは独身のわかき男ならでは味ひ知らぬ憂愁の境ぞかし。この間に華美なる姿して金縁の眼鏡かけたる Blue-Stocking の輩二人三人淡紅の梅花のもとをゆく。肉色のクリームของ如き梅の花は厭ふべし。かのわかき女の冷めたき白歯と、はしたなき English の会話とはことに興なし、我はただ花下の若草の上を日光の匍ひ来りてかなたの小さきベンチの脚に射せる淡黄緑のあるかなきかのかげのみを見つめたり。

マチ擦〔す〕れば火は風に消えて巻煙草のけむり一すぢのぼるほどにさみしき鐘は鳴る――盲啞院晩餐の鐘。

小石踏みつつ後を通る紳士の右の手にもてる新聞紙の包はや薄青し。太く、細き汽笛……新築中の槌の音……街の小兒らの声……わが遂に歩み入る竹林の青さ、日かげは灑されて新しく、わがインバネスに、ノートの罫に、径を超えて空木〔うつぎ〕の幹にて衰へ、キンギンボク、毒ウツギの青き葉は暮れやらぬ陰影のなかにありて、小砂利のあかりに鋭く嘆く。

猫柳のぼやぼやは銀紫にして、その下の廃れたる他の面には沈まんとする太陽の半円浮び、そが黄にして赤き光薄れ揺らぎつつ青みを帯べる銀の冷〔つめ〕たさに拡がる。

豆腐〔とうふ〕イ……豆腐イ……

テウテ胡桃〔くるみ〕の淡紫の幹――坂をのぼりきりたるところより貯蔵庫（柑子類の植物を入れたる）の煉瓦壁見ゆ。何時も何時もわが歩みの目標となる軟かなるその壁の色はまだ芽にいでぬ薬草のにほひ痛き畑のあなたに暮れゆかんとす。

植物園の鐘鳴る。

事務室の辺より四十ばかりの憐れなる女淡青の風呂敷包を背に負ひ、手には粗末なる蜜柑函を持ちて歩み来る、木材のにはひ空虚なる函に新し、この女西洋館前のだらだら坂を下りゆく時その淡黄にて力なき壁の夕日を振りかへる。彼処には簇立せるシュロランの高き幹黒く、硝子窓にカーテン薄汚なく、入口の扉〔ドアー〕は半ば斜に開きたり。藁づとの褪めたる色、ハヒビヤクシンの傾斜面の暗青色の静止――短艇〔ボート〕の船腹の如き雲灰白色の別館の上に薄れんとし、ヒマラヤ杉ひとり早春の風に戦ぐ、大きな魚〔さか

な] の青き骨のごとく。

そのかげよりまた四十前後の女園丁三人手拭の頬冠りして出て来る、坂を下るとき、そのなかの素足の女半ば青きシラガミススギの蔭にゆきて、青き弁当の包を取り出しながら連のあとより急ぎゆく。

われもまた出で去る。

入口の看守はさみしげに座り、ユヅリハの葉柄の赤きが暮れんとして、閉さぬくぐりの間よりかなたの街の薄ら明をさしのぞき……さしのぞく……

(植物園手記)

春を待つ間

I 冬のさきがけ

一

ふくらなる羽毛襟巻〔ボア〕のほひを新らしむ十一月の朝のあひびき

二

遠々しくなりし女のもとへ二首

いと長き街〔まち〕のはづれの君が住む三丁目より冬は来にけむ

しみじみと人の涙を流すときわれも泣かまし鳥のごとくに

三

いちはやく冬のマントをひきまはし銀座いそげばふる霰〔みぞれ〕かな

電柱〔でんちゆう〕の白き堤子〔ていし〕にいと細く雨はそそげり冬きたるらし

四

霊〔たましひ〕の薄き瞳を見るごとし時雨の朝の小さき白鳴鐘〔めざまし〕

なつかしき憎き女のうしろでをはのかに見せて雨のふりいづ

五

男ぶりには惚れんばな、

煙草入の銀かな具がそれが因縁たい

煙草入の銀のかな具のつめたさがいとど身に染むパチと鳴らせど

六

夜をこめて風見〔かぎみ〕のきしりさびしさの身に染〔し〕む空となりにけるかな

さいかちの青さいかちの実となりて鳴りてさやげば雪ふりきたる

Ⅱ 戯 奴

一

一月や道化帽子の色あかき一寸坊の小屋に雪ふる

二

かなしや雪のふる日も道化ものもんどりうつとよく馴れにけり
ほこりかにとんぼがへりをしてのくるわかき道化に涙あらすな

三

夜〔よる〕おそくひとりひそかに帰りきて道化衣裳を脱〔と〕る男あり
感冒〔かぜ〕なひきそよ朝は冷〔つめ〕たき鼻の尖〔さき〕ひとり凍〔こゝろ〕えて春を待
つ間に

Ⅲ 雪

一

一寂しさに赤き硝子を透かし見つちらちらと雪のふりしきる見ゆ

二

厨女〔くりやめ〕の白き前掛〔まへかけ〕しみじみと青葱の香の染〔し〕みて雪ふる
つつましき朝の食事に香をおくる小雨に濡れし洎芙藍〔さふらん〕の花

三

横浜埠頭所見

つや青き支那の料理人〔コック〕が面〔つら〕がまへ憎しとばかりうつ霰かな
腰ひくき浜のガイドが襟にさす温室〔むろ〕咲きの花の色の赤さよ

四

ぬくぬくと双手〔もろて〕さし入れ別れゆくマフの毛いろの黒き雪の日
薄青き路上の雪よあまつさへ日てりかがやき人妻のゆく

五

君かへす朝の舗石〔しきいし〕さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

六

河岸の明け暮れ

猫柳薄紫に光るなり雪つもる朝の河岸の景色に
屋根の雪屋根をすべると三味線の棹拭きかけて泣く女かな

七

木挽町の河岸の夜ふけに

雪ふるひとりゆく夜の松の葉に忍びがへしに雪ふりしきる

八

植古聿〔チョコレート〕嗅ぎて君待つ雪の夜は湯沸〔サモウル〕の湯気も静ころなし

ああ冬の夜ひとり汝がたく暖炉〔ストーブ〕の静ころなき吐息おぼゆる

九

ひとよよのつねの

恋となあはれおもひたまひそ

雪の夜の紅〔あか〕きゐろりにすり寄りつ人妻とわれと何とすべけむ

十

悪夢のあとの朝明

狂ほしき夜は明けにけり浅みどりキャベツ畑に雪はふりつつ

雪ふるキャベツを切ると小男が段々畑をのぼりゆく見ゆ

十一

わかき日は赤き胡椒の実のごとくかなしや雪にうづもれにけり

Ⅳ 早 春

一

その翌朝〔よくあさ〕おしろいやけの素顔吹く水仙の芽の青きそよかぜ

二

四十路びと面〔おも〕さみしらに歩みよる二月の朝の洳芙藍〔さふらん〕の花

三

つつましきひとりあるきのさみしさにあぜ菜の香すら知りそめしかな

あはれなるキツネノボタン春くれば水に馴れつつ物をこそおもへ

四

みじめなるエレン夫人が職業「なりはひ」のミシンの針にしみる雨かな
名なし草紅「あか」く小「ちひ」さく咲きそめぬみすぎ世すぎの窓の日向「ひなた」に

五

春が来た。黄色なサンシユユの梢に、沈丁に、
針えにしだの苦き尖りに
沈丁の薄らあかりにたよりなく齒の痛むこそかなしかりけれ

六

猫柳春の暗示のそことなくをどる河辺を泣きてもとほる
猫柳ものをおもへば猫の毛をなづるここちによき風も吹く

七

細葱の春の光をかなしむと真昼しみに小犬つるめる

野に来〔きた〕れば遠きキャベツの畑をゆく空ぐるまの青もなつかしきかな

八

すずろぐは葱か、キャベツか、きさらぎのそことなき春の暗示よ

ふくれたるあかき手をあて婢女〔はしため〕が泣ける厨〔くりや〕に春は光れり

V 寂しきどち

一

かりそめにおん身慕ふといふ時もよき俳優〔わざをぎ〕は涙ながしぬ
わが愛〔め〕づる小さく晒〔さも〕しくいぢらしき白栗鼠〔しろりす〕のごと泣くは誰ぞ
や

泣きたまふな、あまりにさびし

いざやわれとんぼがへりもしてのけむ涙ながしそ君はかなしき

二

わがどちよ寂しきどちよつねに見て思へばくるし泣かざれば憂〔う〕し
おのがじし弱きけふ日の涙をばはふり落して鳴ける小鳥ら

寂しさのこのもかのもにへりくだり泣けば心の響きこゆる

涙してひとをいたはるよそ人のあつき心をわれに持たしめ

三

つかのまも君を見ずては抑へがたきかなしき狐つきそめにけり

四

歇私的里〔ヒステリー〕の冬の発作のさみしさのうす雪となりふる雨となり

冷〔ひや〕やかに薄き暁〔まぶた〕をしばたたく人にな馴れそ山の春の鳥

五

芥子のたねひとり掌〔て〕にのせきらきらと蒔けば心の五月〔さつき〕忍ばゆ

白き露台

I 春 愁

一

わかき日の路上にて

欺けとていまはた目白僧園の夕〔ゆふべ〕の鐘も鳴りいでにけむ

二

ソフィー、けふもまた気づかはしさうな

お前の瞳に薄い雲がゆく、薄い雲がゆく

春はもや静ころなし歇私的里〔ヒステリー〕の人妻の面〔かほ〕のさみしきがほど

三

浅草聖天横丁

君見ずば心地死ぬべし寢室〔しんしつ〕の桜あまりに白きたそがれ

四

私は思ふ、あのうらわかい天才のラムボオを、

而して悲しい宝石商人の息づかひを、心を

アーク燈いとなつかしく美しくき宝石商の店に春ゆく

美しく小さく冷〔つめ〕たき緑玉〔エメラルド〕その玉掬〔す〕らば哀〔かな〕しから
まし

いと憎き宝石商の店を出で泣かむとすれば雪ふりしきる

五

温かに洋傘〔かさ〕の尖〔さき〕もてうち散らす毛茛〔きんぽうげ〕こそ春はかなしき

しみじみと二人〔ふたり〕泣くべく椅子の上の青き蜥蜴をはねのけにけり

六

定齋〔ぢやうさい〕の軋〔きし〕みせはしく橋わたる江戸の横綱〔よこあみ〕鶯の啼く
桜、さくら、街のさくらにいと白く塵埃〔ほこり〕吹きつけけふも暮れにけり

七

鐸〔すず〕鳴らす路加〔ルカ〕病院の遅〔おそ〕ざくら春もいましかをはりなるらむ

Ⅱ 夜を待つ人

一

思ひ出の赤き毛糸よ、夕暮の薄らあかりにたゞたぐれ、静ころなく
やはらかに赤き毛糸をたぐるとき夕とどろきの遠くきこゆる

二

泣かむとし赤き硝子に背を向けつ夕〔ゆふべ〕は迫る窓の内部〔うちら〕に
いつしかと身は窓掛に置く塵の白きがごとも物さびてける

三

かるがろと女腰かけなにやらむ花あかき窓に物思ひ居り
よしやあしや君が銀座の入日ぞらほのかに暮れて夜となりにける

四

つくづくと昼のつかれをうらがへしけふもランプを点〔とも〕すなりけり

編みさしの赤き毛糸にしみじみと針を刺す時こほろぎの鳴く

五

鳴りひびく心甲斐絹を着るごとしさなりさやさやかかる夕に

これやこの絹のもつれをときはぐしほのかに夜〔よる〕を待つすべもがな

六

露西亜の白夜にはあらねども

かなしきは気まぐれごころ宵のまに朝の風たち蝸〔かなかな〕の啼く

松の葉の松の木の間をちりきたるそのごとほそきかなしみの来る

Ⅲ なまけもの

一

なまけものなまけてあればこおひいのゆるきゆげさへもたへがたきかな

二

ほればれと歌ふにしくはなかるらむおもへば憂〔う〕しや涙ながるる
ものおもふわかき男の息づかひそなたも知るやさるひあの花

三

なまけもの昼は昼とてそことなきびんつけの香にも涙してけれ
へら鷺の卵かへすとなまけものなまけはてたるわれならなくに
おづおづとわかきむすめを預れる人のごとくに青ざめて居り

ひとりゐて罪あり

このおもひ人が見たらば墓〔ひき〕となれ雨が降つたらへら驚となれ

四

わがゆけば男のにはひちかよると含羞草〔はにかみさう〕の葉を閉づるかも
ものおもへば肩のうしろにこそばゆきわかきをなごのといきこそすれ

五

夕暮のあまり赤さになまけものトンボがへれば啼くほととぎす

Ⅳ 女友どち

一

ゆくりなく庚申薔薇〔かうしんばら〕の花咲きぬ君を忘れて幾年〔いくとせ〕か経し

二

うらうらと二人〔ふたり〕さしより泣いてゐしその日をいまになすよしもがな
ただひと目君を見しゆゑ三味線の絃〔いと〕よりほそく顫ひそめにし

三

才高きある夫人に

ほれぼれと君になづきしそのころはや裏切りてゆくゑしらずも

四

嗅ぎなれしかのおしろいのいや薄く冷〔つめ〕たき情〔なさけ〕忘れなくに

五

女は白き眼をひきあけてひたぶるに寄

り添ふ、淫らにも若く美しく

どくだみの花のにほひを思ふとき青みて迫る君がまなざし

六

あるあはれなる女に

いつとなく親しむとなく寄るとなく馴れし情〔なさけ〕も忘れなくに

七

偽おほく而もなほ美しき女

ありけりその女消えさりにけり

くちびるの紅〔あか〕く素顔のいと蒼き女手品師君去りにけり

V 白き露台

一

ひとたび別れて

かはたれの白き露台に出でて見つわがおもふ人はいづち去にけむ

二

君には似つれ、

見も知らぬ少女なりけり

仏蘭西のみやび少女がさしかざす忽忘草〔わすれなぐさ〕の空〔そら〕いろの花

三

かなしみは出窓のごとし連理草〔れんりさう〕夜にとりあつめ微〔そよ〕かぜぞ吹く
にほやかに君がよき夜ぞふりそそぐ白き露台の矢ぐるまの花

四

その君はいつこにありや、
はつ夏の空も薰りぬ
匂よき宵の口ベリヤ朝の芥子小窓に据ゑて忍ぶ日は来ぬ

五

姿見の中の草生よ
老いほけしたんぽぽも飛ぶ
昨日〔きのふ〕君がありしところにいまは赤く鏡にうつり虞美人草〔ひなげし〕のさく

六

鳩よ鳩よひとりぼちのわが鳩よ

煩悩の赤き花よりやはらかに煙る草生〔くさぶ〕へ鳩飛びうつる

七

とまり木の鳥のころよ

夕かけて白き小鳥のものおもひ木にとまるこそさみしかりけれ

八

空いろよりすこし濃きロベリヤの花は

ほのかに小さくして、しかも敷かたまり

て瞳をひらく。悲しき日その花をながめ

て

空いろのつゆのいのちのそれとなく消 [け] なましものをロベリヤのさく

感覚の小函

いつの日か懐かしいと思つて小窓に据ゑて置いた忽忘草も、青い金剛石花〔ダイヤモンドフラワー〕も、空色のロベリヤももうみんな枯れてしまつて、小石川の植物園に新たに茴香の花の咲く時節が来た。梧桐のかげに客待をしてゐる人力車夫にも、銀座の横町に荷を下すバナナ売の半纏にも硝子屋の白い斜面の日覆〔ひよけ〕にも、愈夏らしき強い光が照りつけて、早や日中から張りわたした蟲売の露店の薄い天幕〔テント〕のかげにも幽かに鈴蟲が鳴きはじめる。なつかしい、然し何となく寂しいやるせない夏、夏は丁度白い服をきたヒステリーの看護婦の夕方の露台〔バルコン〕に出て吹き鳴らすはるもにかのやうに何時も私に新しい哀傷のたねを蒔かしめる。

敬度な私のいまの心持は輕薄なワイルドの美しい波斯模様の色合から薄明り中に翹ばたく白い羽蟲の煙のやうなロウデンバツハの神経に移つてゆく。静かな夏の日の独居〔ひとりゐ〕が私の心をまた小さな仙人掌〔さばてん〕の刺のうへに留らせ、黄色い名も知れぬ三ツの花のうへにしみじみど飛びうつらす。このふた月あまり私はただ静かに自分自身の心を觀照して、燃え狂つた煩惱の花壇から幽かな銀色の蟲の音を拾つてゆくより外に騒が

しい周囲の如何なる事情からも禍される事が無くて過ぎた。私の目下の一大事は驕奢な貴公子の生活を羨む事でもなく、また華やかなバンドマンの歌劇を観にゆくことでもない。さうして無論流行「はやり」の背広を着てお馴染みのカツフエに苦「にが」い珈琲を啜り、リキュールの冷たいさかづきに唇をあつることでもない、おしろいの匂と酒と友人とに離れてからもう既に久しい時が経つた。私はただ独り薄明「うすあかり」の窓側「まどきは」に坐つて縊「よ」れからんだ神経の絹糸のもつれをときほぐし、或は冷たい硝子のフラスコのそのたよりない皮膚の上をつつましやかに匍ひ廻る小さな細蟻の感覚に心をあつめ、いかにしてまた西洋葵の花弁の上に悲しい一日の歎きをとんぼがへりさせるかといふ、たつたそれだけの謙遜な心に真実私自身を洗練して、品の高い陰影の微光のなかに幽かに思想の芽をひらく、譬へやうもないその美しい歓会の時の来るのを待つてゐる。

近代の傷「いた」ましき悩みからぬけいでて純なる小鳥の心にたちかへれよ、たゞ自らを偽るな、涙を惜しめ、而して美しい小さな冷「つめ」たい緑玉「エメロード」のごとく常に悲しい光に息づけよ。若しわれと己れ自身を偽つたなら、白い鷺鳥は蟾蜍「ひきが

へる] となり、黄金の匙は怪しいニツケルのナイフとなり、酒は酢となり、きりぎりすは蚯蚓 [みみづ] となり、恋人の美しい眸 [ひとみ] は忽ち賤しい波羅門の腕環にはめられて一生を浅ましい汗脂 [あぶらあせ] と怪しい畜類の匂に汚されて了ふであらう。

暑い夏の日に涙をながし、さうして身のうちによそならぬわが汗の臭ひを嗅ぎ、なつかしい自分の命を、人よ、汝 [おまへ] がしみじみと思ひ知りえた時、微かな夏と心との感覚をわれとわが指さきによせあつめて浮彫の寂しい小さな白金 [プラチナ] の函のなかに入れ、而して蓋 [ふた] をかたく閉して、幽かな薄明の中にさし置けよ。而して寂しさに堪へかねた時、その上に薄いリキユグラスをのせ、強いウヰスキーの少量を注げ、その黄色の漣が幽かな陰影の刺戟を顫はせて白金 [プラチナ] の微光に投げかくるとき封じられたすべての哀傷が恰も冷たい鍼医 [はりゐ] の銀針のやうに、或は黄緑、青紅、様々の光沢と信実ある結晶の涙を湛へた美しい宝石の音譜のやうに、初めて底の底から洗練され命づけられた感覚の啜泣きを、幽かに幽かに不可思議な夜天のパノラマに伝へるであらう。

私はうらわかき宝石商の涙をよく知つてゐる。さうしてあの天才のラムボヲを喉かして

寂しい商人の群に駆り立てた怪しい宝石の心を、誘惑を、譬へやうもない美しいその魅力を悲愁〔かなしみ〕をよく知つてゐる。さうしてまたオスカアワイルドやヴェルレエヌを牢獄の底に泣かしめた悲しい耽美の心意気をも、青玉の露をふり落す葦の葉の囁きをも、カアネエションの花を恐るる小さな緑蛇の心をも、私はまたよく知つてゐる。

愛人の胸から貫つた小さな青玉の音色は絶えず新らしい私の涙に濡らされてりんりんとあるかなきかに鳴り響く。而して昼は幽かに、夜は清く、朝は寂しい自鳴鐘のやうに時雨の霊〔たましひ〕をそそのかしてほのかに白芥子の花に纏〔まつわ〕る。ともすれば置き忘れたその青玉の眸〔ひとみ〕は微〔ほの〕かなタナグラ人形の陰影〔かげ〕から小さな玉蟲の眼のやうに顫へて、絶えず移り気な私の心を気遣はしさうに熟視〔みつ〕める。而してオペラの幕あきの合図の電鈴のやうにとりとめもなく逍遙〔さまよ〕うてゐる私の夕暮の感覚をひき戻す。

夏、夏、夏の薄暮は何時もアーク燈の光のやうに薄紫の涙に濡れ潤〔しと〕つたやるせない寂しい微光の氛囲氣を私の心の周囲〔まはり〕にかたちづくる。而して今日のとりと

めもない感想も微かな白い羽蟲となつてその陰影の中に閃めきながら鳴り響く青玉の音色
[ねいろ] も暮れてゆく……孱弱な心、繊細な絹糸のもつれをかたよせて、私はまた久し
振りに、あの銀座の青い柳のかげの白い瀟洒な喫茶店の椅子に寂しい孤独の身をなげかけ
て、せめては冷たい一杯のアイスクリームにさらに悲しい哀傷の新しさを味つて見やうか
しら、それとも例日 [いつも] のやうに名も知れぬ黄色い三つの花の上に小さな私の霊を
あづけて、たつた独りで何時までも何時までも泣いてゐやうかしら。それとも私の小さな
涙の玉を赤い西洋葵の上に一踊りとんぼかへりをさして何がなしに笑つて見やうか。……
…ああ、とうとう日が暮れて、鳴り響く青玉の音色も暮れてゆく。

(Echizenbori. 28. VI. 1912.)

哀傷篇

罪びとソフィーに贈

「三八七」番

I 哀傷篇序歌

一

ひとすぢの香 [かう] の煙のふたいろにうちなびきつつなげくわが恋

二

自棄二首

あだごころ君をたのみて身を滅 [おと] す媚薬の風に吹かれけるかな
哀 [かな] しくも君に思はれこの惜しくきよきいのちを投げやりにする

三

花園の別れ六首

君と見て一期 [いちご] の別れする時もダリヤは紅 [あか] しダリヤは紅 [あか] し
君がため一期 [いちご] の迷ひする時は身のゆき暮れて飛ぶこちする

哀〔かな〕しければ君をこよなく打擲〔ちやうちやく〕すあまりにダリヤ紅〔あか〕く恨めし

紅〔くれなゐ〕の天竺牡丹ぢつと見て懷妊〔みごも〕りたりと泣きてけらずや
身の上の一大事とはなりにけり紅〔あか〕きダリヤよ紅〔あか〕きダリヤよ
われら終に紅〔あか〕きダリヤを喰ひつくす蟲の群かと涙ながすも

Ⅱ 哀傷篇

一

悲しき日苦しき日七月六日

鳴きほれて逃ぐるすべさへ知らぬ鳥その鳥のごと捕へられにけり

二

かなしきは人間のみち牢獄〔ひとや〕みち馬車の軋〔きし〕みてゆく礫道〔こいしみち〕

眼をつぶれど今も見えたる草むらの麦稈帽は光るなりけり

馬車霞が関を過ぐ

大空に円き日輪血のごとし禍〔まが〕つ監獄〔ひとや〕にわれ墮〔お〕ちてゆく

胸のくるしさ空地〔あきち〕の落日〔いりひ〕あかあかとただかがやけり胸のくるしさ

まざまざとこの黒馬車のかたすみに身を伏せて君の泣けるならずや
夕日あかく馬のしりへの金網 [かなあみ] を透きてじりじり照りつけにけり

向ふ通るは清十郎ぢやないか

笠がよう似た菅笠が

夏祭わつしよわつしよとかつぎゆく街 [まち] の神輿 [みこし] が遠くきこゆる
泣きそ泣きそあかき外 [と] の面 [も] の軒したの廻り燈籠に灯 [ひ] が点 [つ] きにけり

三

うれしや監獄にも花はありけり

草の中にも赤くちひさく

しみじみと涙して入る君とわれ監獄 [ひとや] の庭の爪紅 [つまぐれ] の花

女はとく庭に下りて顫へゐたり、数珠つなぎ
の男らはその後より、ひとりひとりに跟けつ
つ匍ひいでて紅き爪紅のそばにうち顫へゐ
たり、われ最後に飛び下りんと身構へて、ふと
をかしくなりぬ、帯に縄をかけられたれば前の
奴のお尻がわが身体を強く曳く、面白きかな、
悲しみの極まれるわが心、この時ふいと戯けて
やつこらさのさといふ氣になりぬ

やつこらさと飛んで下「お」りれば吾妹子「わがもこ」がいぢらしやじつと此方「こち」
向いて居り

同じく二首

編笠をすこしかたむけよき君はなは紅〔あか〕き花に見入るなりけり

鳳仙花紅〔あか〕く咲ければ女子もかくてかなしく美しくあれよ

四

監房の第一夜

この心いよよはだかとなりけり涙ながるる涙ながるる

罪びとは罪びとゆゑになほいとかなしいぢらしあきらめられず

五

ふたつなき阿古屋の玉をかき抱きわれ泣きほれて監獄〔ひとや〕に居たり

どん底の底の監獄〔ひとや〕にさしきたる天〔あま〕つ光に身は濡れにけり

テテツプツプ

弥惣次ケツケ

日もすがらひと日監獄〔ひとや〕の鳩ぽつぽつぽつぽと物おもはする

＊柳河の童謡、テテツプツプは鳩ばつぽのこと

六

二日経て弟面会に来りければ

監獄〔ひとや〕にも鳳仙花咲けりいと紅〔あか〕しとこの弟に言ひ告げやらむ

母びとは悲しくませば鳳仙花せめて紅〔あか〕しと言ひ告げやらむ

七

監獄の庭に引き出されて、ある時

いつまでか日は東よりのぼるらむ昨日〔きのふ〕に同じ赤き花咲く

あはれなる獄卒どもが匍ひかがみ紅〔あか〕きダリヤの毛蟲とる見ゆ

太陽のもとに許されて尿するは

うれしきかな楽しきかな

狂人〔きちがひ〕の赤き花見て叫ぶときわれらしみじみ出て尿〔いばり〕する

赤き花見つつ涙し顔〔かたく〕なのこの若ものが物言はぬかも

八

バリカンの光うごけばしくしくと痛〔いた〕き頭〔かしら〕のやるせなきかなや

バリカンに頭〔かしら〕あづけてしくしくとつるむ羽蟲を見詰めてゐたり

九

真昼の監房にてある時

おのれ紅〔あか〕き水蜜桃の汁〔つゆ〕をもて顔を描〔か〕かむぞ泣ける汝〔なれ〕が顔
夕されば入日血のごとさしつくる監獄〔ひとや〕うれしや飯〔まま〕を食〔た〕べてむ

またある時

驚きてふと見つむればかなしきかわが足の指も泣けるなりけり
わが辜丸〔ふぐり〕つよくつかまば死ぬべきか訊〔き〕けば心がこけ笑ひする
淫〔たは〕れ歌うたひつくして泣くなめり忘れ難かりあきらめられず

殺人犯隣にあり

猫のごと首絞められて死ぬといふことがをかしさ爪紅〔つまぐれ〕の咲く

監獄にて子を生みし女ありけり

いかなる罪業のめぐりなるらむ

恐ろしくおのれ死なむとつきつめぬいきいきとまたも赤子啼き啼く
夕されば火のつくごとく君恋し命いとほしあきらめられず

十

夕暮より夜にかけて

曇り日の桐の梢に飛び来り蝸 [かなかな] 鳴けば人の恋しき
市ヶ谷の逢魔 [あふま] が時となりにけりあかんぼの泣く梟の啼く
夜となりぬのうまくさんまんだばさらだせんだまかろしやだとわが父の泣く声のきこゆる
梟はいまか眼玉 [めだま] を開くらむごろすけほうほうごろすけほうほう

深夜二首

たれこめて深きねむりに墮 [お] つる時わが傍 [そば] に来り寝る女あり
君もなほ死なずしありけむさめざめと夜の間 [ま] に見えて涙を流す

十一

裁判の日、七月十六日

一列〔ひとつら〕に手錠はめられ十二人涙ながせば鳩ぽつぽ飛ぶ

鳩よ鳩よをかしからずや囚人〔めしうど〕の「三八七〔さんはちしち〕」が涙ながせる

十二

法廷へのゆくみちにて

向日葵〔ひぐるま〕向日葵囚人馬車の隙間〔すきま〕より見えてくるくるかがやきにけれ

十三

すべてなつかしすべてなつかし

鳳仙花われ礼〔ゐや〕すればむくつけき看守もうれしや目礼したり

鳳仙花よ監獄〔ひとや〕にも馴れ罪にも馴れ囚人〔しうじん〕にさへも馴れむとするか

十四

許されたり許されたり

監獄〔ひとや〕いでぬ重き木蓋〔きぶた〕をはねのけて林檎函よりをどるここに

監獄〔ひとや〕いでぬ走れ人力車〔じんりき〕よ走れ街〔まち〕にまんまろなお月さまが
あがる

十五

監獄〔ひとや〕いでてじつと顫へて噛む林檎林檎さくさく身に染〔し〕みわたる

くれなゐの濃きが別れとなりにけり監獄〔かんごく〕の花爪紅〔つまぐれ〕の花

Ⅱ 続哀傷篇

空見ると強く大きく見はりたるわが円〔つぶ〕ら眼に涙たまるも

二

烏羽玉〔ぬばたま〕の天竺牡丹咲きにけり男手に取り涙を流す

烏羽玉の黒きダリヤにあまつさへ日の照りそそぐ日の照りそそぐ

三

お岩稲荷にゆきて

あまつさへ夾竹桃の花あかく咲きにけらずやわかき男よ

四

木更津へ渡る。海浜に出でて

あまりに悲しかりければ

いと酢〔す〕き赤き柘櫓〔ぎくろ〕をひきちぎり日の光る海に投げつけにけり

松川といふ旅館に泊りぬ

白き猪あまたゐたりけり

白き猫あまたゐねむりわがやどの晩夏〔ばんか〕の正午〔まひる〕近まりにけり

驚きて猫の熟視〔みつ〕むる赤トマトわが投げつけしその赤トマト

五

あかあかと騒〔さや〕ぎ廻りそ人力車夕日に坐り泣く男あり

またぞろふさぎの蟲奴〔め〕がつのるなり黄なる鶏頭赤き鶏頭

六

やはらかにロンテニースの球〔たま〕 光る公園に来てけふもおもへる
草の葉に辻〔すべ〕 りちろめく青晰暢〔あをとかけ〕 その兎悲しも夕日は光る

七

くつわ蟲を蟬かと思うた、
ひとりひるねの宵のねざめに
かなしければ昼と夜とのけぢめなしくつわ蟲鳴く蝸〔かなかな〕 の鳴く

八

曇り日の朝の瓦の見はるかしを鳩歩み居れりさみしきか鳩よ
電線〔はりがね〕 に雀とまりてつるみたり悲しかりけりまた飛んでけり

九

心心赤き実となり枝につく鴉食〔は〕まむとすはぢぎれむとす

暴風雨来りぬ面白きかな面白きかな

柿の赤き実隣家〔りんか〕のへだて飛び越えてころげ廻れり暴風雨〔あらし〕吹け吹け

十

浅草にて

電線〔はりがね〕に鳶の子が啼き月の夜に赤い燈〔ひ〕が点〔つ〕くぴいひよろろよ
なになれば猫の兒のごと泣くならむ鳶〔とんび〕とまれる電線〔はりがね〕の上〔うへ〕
に

十一

河岸あるき

横網〔よこあみ〕に一銭蒸汽近づくと廻るうねりも君おもはする

見れば乞食〔かたゐ〕は腐れ赤茄子〔トマト〕をかいつかみひたぶる泣きて食〔くら〕ふ

なりけり

小犬二匹石炭舟〔ぶね〕のふなべりを鳴けり狂へり夜に叫び居り

ぬば玉のくらき水の面〔も〕を奥ふかく石炭舟のすべりゆきにけり

十二

冬来る

十一月は冬の初めてきたるとき故国〔くに〕の朱欒〔ザボン〕の黄にみのるとき

唳々とひとすぢの水吹きいでたり冬の日比谷の鶴のくちばし

IV 哀傷終篇

一

かなしみに顫へ新たにはぢけちるわれはキャベツの球〔たま〕ならなくに

二

くるしくるし堪へがたし

わが心ただひとすぢとなりにはけり笛を吹け吹けとんぼがへれよ

ひとをどりひやるろと吹けば笛の音もひやるろふれうと鳴るがいとしさ

三

思ひ出のひとつふたつ

代々木の青櫛〔あをかし〕がもとに飛びありく白栗鼠〔しろりす〕のごとく二人〔ふたり〕

抱きし

春くれば白く小〔ちひ〕さき足の指かはゆしと君を抱きけるかな

手にぎりてかたみに憎み蓴菜〔じゆんさい〕の銀の水泥〔みどろ〕を見つめつるかな

死ぬばかり白き桜に針ふるとひまなく雨をおそれつつ寝ぬ

蠟燭をひとつ点〔とも〕して恐ろしきわれらが閨をうかがひにけり

その翌朝〔よくあさ〕君とわが見て慄〔ふる〕へたる一寸坊が赤き足芸

四

旧歡とどめがたし生はかたく死はやすし

ひなげしのあかき五月〔さつき〕にせめてわれ君刺し殺し死ぬるべかりき

五

男泣きに泣かむとすれば竜胆〔りんどう〕がわが足もとに光りて居たり

このかなしき胸のそこひゆこみあぐるくるめきの玉は鉄の玉かも

六

来て見れば監獄署の裏に日は赤くテテツプツプと鳩の飛べるも

囚人の泣く声か、拷問の叫びか

と見れば監獄署裏の草空地 [くさあきち] にぶらんこの環 [くわん] のきしるなりけり

七

野辺あるき

氷閉ぢ野菜つめたき冬のみちゆけどもゆけども人に逢はなく

煤梱 [すすけむり] たなびくもとに葛飾 [かつしか] の青菜畑ははるばると見ゆ

八

夜ふけて

ぐろきしにあ〔ゝゝゝゝゝ〕つかみつぶせばしみじみとから紅〔くれなゐ〕のいのち忍

ばゆ

時計の針Ⅰ〔いち〕とⅠとに来〔きた〕るときするどく君をおもひつめにき

九

母の云へらく

どれどれ春の支度にかかりませう紅〔あか〕い椿が咲いたぞなもし

十

あかんばを黒き猫来て食みしといふ恐ろしき世にわれも飯食〔いひは〕む

犬が啼き居り乾草〔ほしぐさ〕のなかにやはらかく首突き入れて犬が啼き居り

十一

ひもじきかなひもじきかな

わが心はいたしいたしするどにさみし

吾が心よ夕さりくれば蠟燭に火の点〔つ〕くごとしひもじかりけり

白 描

いかにも悩ましい晩だつたと思つた。歩行〔ある〕いてゐるとまるで自分の身体〔からだ〕が蒼白いセンジユアルな発光の中にひきつつまれて匂のふかい麝香猫か何そのやうに心までが腐爛してゆくかとさへ思はれた。

霧、霧、濃密な深い麻醉の雰囲気に新鮮な瓦斯が光り、電燈がぼやけ、アーク燈が濡れた果実のやうに香気を放ち、葉柳のかげに、舗石に、店々の飾窓〔シヤウウインドウ〕に、さまさまの光沢と陰影とが入り乱れて息づかひ深く霧が愈ふりそそぐ。行きかふ人かげ、馬車や自働車の燈〔ひ〕のくるめき、電車の鐸〔すず〕――銀座の二丁目から三丁目にかけて例〔いつ〕も見馴れた浅はかな喧騒の市街が今はほかされ掻き消されて、ただ不可思議な恍惚と濃厚な幻感とが恰度水底のキネオラマのやうに現出する。

その底を私は歩行〔ある〕いてゐた。たとへ無罪になつたにせよ、かりにも人妻と牢獄に堕ちた私、敗徳者、――私は深い心に泣き乍ら幻想の燈〔ひ〕かげに弱つた身体〔からだ〕

だ] を労つてゆく、潤 [しめ] つた霧がそこにもここにも重い層をなして私の身邊を圧へつける。夏帽子の麦稈、啣へたパイプの火、冷たい目、耳、終 [しま] ひには背後 [うしろ] から肩に手をかけ、咽喉を絞め、剰へ甘いものの腐れた匂さへ病ましい両の頬つぺたに吹きつける。而も耻と悲哀に弾ちぎれさうな胸を抑えて、怖々 [おづおづ] と人目を忍んで歩 [あ] るいてゆく切りつめた今の自分の心にも何時しか忘れはてた淫蕩な罪の記憶が泣かむばかりに芽ざしてくる浅間しさ。白い霧の中に立つて振り返ると、白い尻尾でも動くやうに足元から怪しげな影が逃げてゆく、向き直つてそつと歩み出すと重い霧の層までが又ふうわりと後から白くからみつく。真白な獣 [けもの]、私は顫へて自分の身体がさうした陋 [さも] しい不思議な白い獣 [けもの] に変化してゆくのではないかと思つた。苦しい、苦しい、まるで獣芝居に出てくる白猫の役者のやうに初めは白い毛皮の身のまはりを嘲笑 [あざわら] つてゐた人間の浮かれ心までが、遂には真実に淫逸な四足 [よつあし] 獣の悩ましい悲念に歸つてゆくのではないかとさへ思はれる位、霧は怪しくふりそそいでくる。私は心の心に泣きながら、痛さに腫れた乳の上をしつかと抑えて、折々不気味

な若い白痴の女のやうに自分の背後〔うしろ〕を振り返つた。そのうちに何時の間にやら重いたどたどしい足どりが泥酔漢〔よひどれ〕めいて来て、時とするとその痛い乳の上から真白な畜生の手でもふいと飛び出しさうなそんな気がしてただもう恐ろしく、抑えては引つ込ませ、抑えては引つ込ませ、益々深い濃霧の中をあてどもなくまぎれ込んで了ふのであつたが……。

だがもう、時が過ぎた。

夜が更け、空が霽れ、蒼褪極めはてた経験の貴さと冷たい靈性のなやみを染々と身に嘆ぎわけて、哀傷のけものは今深い闇のそこひからびやうびやうと声を秘〔ひそ〕めて鳴き続ける。将に午前二時半、夜明前三時間、拭きすました紫檀の机に鏡を立て、つくづくと陰しくなつて了つたわれとわが顔をぢつと凝視〔みつ〕めてゐた私は心の底から突きあげてくる悲〔かな〕しさと狂はしさから、思はず傍にあつたグロキシニアの真赤な花を掴みつぶした――鏡の中に一層〔ひときは〕強く光つてゐた罪惡の結晶が血のやうに痙攣〔つ

りかゞ] んだ五つの指の聞から点々と滲み出る。引き裂き、かき爪 [むし] りながら緊張しきつた心がまた遣瀬もなく啜泣く苦しさ。幸に獣ともならず迷うて迷ひぬいて、やつと夜ふけに静観の境地を得た私の靈魂はまた少らずわれと驚かされて、そつとまた鏡の中を透かした。哀れな瞳が狂気したやうな額の下からぢつと此方 [こちら] を見てゐる。私は悸然 [はつ] として乳の上を抑へた、白い手の芽も飛び出さなかつた、と思ふとぢつと黙 [つぐ] んだ唇が稍安心と憎惡の薄笑ひを浮べる。

夜が愈更けた。発作の後の悲しみが又犇々と迫る、深い恐怖に顫へ乍らグロキシニアと冷たい鏡を片よせて、私はまた新しく顫へ初めた素つ裸の感覚から眼を凝らし、耳を聳て、まるで匍ひつくばつた生蕃の兒のやうに生々と暗い闇の核心を凝視 [みつ] めた。

こほろぎが鳴いてゐる…………あれほど執拗 [しつこ] く人を苦めた白い濃霧の集団までがもう黴の毛はどの細かい初秋の啜り泣きとなつて消え散つて了ひ、霊岸島の瓦から瓦へ、ただ幽かに薄明るい露の潤 [しめ] りがチラチラと夜光虫の漣波の如うに私歇的里 [ヒステリー] の蒼い光をすべらし、取り残された彼方此方 [あちらこちら] の陰鬱な重い土蔵

の廂合〔ひあはひ〕から今はまたセンチメンタルな緑色の星の影さへ一つ二つと燦〔きら〕めき初める、ホフマンスタイルの夜の景色、暗碧な空の心――こほろぎまでが恐ろしいお岩稲荷の物かけからまるで小さな硝子玉でも磨り合はせるやうに絶間〔きり〕もなく感覚的な啜り泣ききが続ける。

――苦痛と羞辱とに惨たらしく心のデリカシーを傷けられて神経は愈鋭く知覚は弥が上に冷たくなつてゆく私の現在にもなほ哀しみ極つたかういふ法悦のひと時はある。さり乍ら、緊張し尽した今日此頃の感傷の鋭さは殆どその極度に達してゐる。苦しい、今のやうな切迫〔せつぱ〕つまつた生活があと三日と続いたなら私は狂気するか、自殺か、それとも疲れはてた肉体自身がそれより以前に脆い破滅を持ち来すか、何れにしても私の生命は長い事はない。目下の錯乱した官能には最早や轡蟲と蝸〔かなかな〕と、隣家の自鳴鐘〔めざまし〕ときりぎりすとの区別さへつかぬほど昼と夜とが顛倒され、色触の世界にも何時しか夏と冬とが入れ代つて了つてゐる。剰へ日が血のやうに西からのぼり、月が痺れて東へ落ちかかる怪しい神経病者の幻想〔ファンタジヤ〕さへ時折発作のやうに霊自身を慥〔お

び] やかす。

今もこほろぎが鳴いてゐる。私はちつと坪庭の闇を透かしながら、そこに如何なる罪惡が企[たくら]まれつつあるか、如何なる草木昆蟲の感覚が又かういふ深夜の心に冷笑し、惑溺し、干涉し、声もなく歔歔し流涕するかに耳を傾けた。それがよしや暗黒の中に各々幽かに万物照応の理順を秘[かく]してゐるとはいへ、鋭感な今の私には松の葉が如何に光り、櫛が如何に戦慄し、雪の下が如何に肺病の蒼白い皮膚を滑らかな苔の上に擦りつけるか瞭然[はつきり]感知し洞察する事が出来る。

沈黙が一しきり続いてゆく。

ふと異しい物音がした、キキと何かを引つ搔くやうな、……………と思ふとまた性急に、然し怖々[おづおづ]と、否寧ろ時折は粗雑[がさつ]に四肢[よつあし]で引つ搔きちらす悪戯[いたづら]な爪の響——それが絶間もなくキキとキキと続いてくる。畜生奴[ちきしやう]！私はつと立つて電燈をパツとその方へ向けた。薄緑色の生絹[きぎぬ]の笠を透かして青く漉されたオスラムの燭光が二階から出窓を斜めに暗い隣の屋根へさつと射

〔さ〕す。私はちつと注意深くその方へ眼を注いだ。

何といふ悲しい光景〔シーン〕であろう、そこには不意の輝きに驚かされた柿の木が真青に顫へ上つた、と思ふと、濡れた葉とまた真青な果の簇〔むらがり〕がキラキラと私の眼を射返した。何たる神秘、落ちついた真青な輝き……暗い深夜の秘密に密醸された新鮮な酸素の噓びが雨後の点滴〔てんてき〕と相連れて、冷たい霊性の火花も今真青に慄〔わなゝ〕き出した。……その下に猫がある。白い小さな猫がある。青い葉かげを透かして、緑青色に燦〔きら〕つき出した新しいコールタール塗の屋根の傾斜面からはつと驚いたやうに此方〔こちら〕を眺めてゐるではないか。――顫へる如〔やう〕に白い華奢〔さやしや〕な身を疎〔すく〕め、背を聳て、ただちつと青い射光の一点を見上げたまま、退〔の〕くにも退〔の〕かれず、全身の悲哀と恐怖とをたつた二つの金色の瞳に集めて、吸入るやうに前肢〔まへあし〕をそろえた、あの眼、あの眼、あの切迫詰〔せつぱつま〕つた眼の光、……ちつと凝視〔みつ〕めてゐるうちに私の瞳は未だ曾て見たことのない皮肉な微笑と燃え上る憎悪と怒とに顫へて来た。

二つの霊がひたと今向ひ会つてゐる。而して各々の急所急所をきゅつと凝視〔みつ〕めて、痛ましいほどの凌辱を相互に続ける、その恐怖〔おそれ〕と、憎々しさ、私は電球の尖をキツと差向けたまま、まるで青ざめはてた大刀の魚のやうに立ち竦んだ。

ふと、ある苛酷な夢の記憶が私の胸の底から突き上げる。

＊

それは今朝ほど（もう昨日の事になつたが）の夢に見た、夢とも覚えぬほどの的確に而して冷酷な一喜劇である。

夢は幽かな金線の顫へから初まる。ただ蒼い幻の中の出来事である。冷たい何かの切石の上に、幽かな薄玻璃の鏡の如〔やう〕に坐つて居た私の前に何時からとなく現れてひたと一列に座つた八九人の兒供がある。うち見るところ七八歳〔ななつやつ〕から十五六〔じふごろく〕歳までの頑是ない稚兒の時代から既に物心ついた少年期の成人しきつた顔容〔かほつき〕の奴まで、それがたつた一人の生長史をまざまざと見せつけられるかと思はれるまで、眼の大きい、額の広くつて青い、鼻の尖つた、何れも寸分連はぬ、小賢しい面色を

してゐる。而してただちつと私を凝視めてゐる。蒼い光が何処からともなく其奴〔そいつ〕らの横顔に射しつけると恐怖〔おそれ〕とも驚異〔おどろき〕とも、悲しさとも怪しさとも何とも名状し難い冷たさが犇々と私の身邊に詰め寄せて来た。暫時〔しばらく〕誰一人口を聞くものがない。遠くで幽かにチリツンチリツンと一絃の金線をつまぐる音色がする。

『どうぞその兒を引き取つて下さいませんか。』

私は悸然〔ぎよつ〕とした。声がしたのである。確かに、それが聴き覚えのある声である。人間の声とも畜類の呻きとも、又は草木の叫びとも、何ともつかぬ、冷酷な、それでは偏に縋り付くやうな、さうかと思ふと又心から人を見くぶりせせら笑ひ影の影から操〔あや〕かし瞞〔たぶ〕らかすやうな、一度聴いたら逃れる事も忘れる事も出来ない、何かの深い執念と怪しい魔力を秘〔ひそ〕めた声音〔こわね〕である。

『たつた一人で宜しいのです、どうぞ何奴〔どいつ〕か拾つて下さいませんか。』

声は何処からともなく迫ひ縋るやうに続いた。愈媚びて愈悲しげな哀訴の裏には切つて放した残忍と詰詐と苦しい蠱惑とがある。私は慄へた。而してただちつと一列の子供達を

凝視〔みつ〕めた。同じやうな冷たい顔がぢつと同じやうに此方〔こちら〕を眺めてほろりほろりと円〔つぶ〕らな大きい眼の底から涙を流してゐる。私の頬にもほろほろ涙が流れてきた。

チリツンチリツン……………金の絃〔いと〕をまさぐる音色がする。

その声は何処〔どこ〕からした？ 私は其奴〔そいつ〕らの背後〔うしろ〕を差覗くやうに幾度か蒼い光の中を透かして見た。猫兒一匹ゐさうにもない。ただ置いてきぼりにされた幼い霊〔たましひ〕が泣いてゐるばかり、金の絃の顫音さへはてはやんで了つた。

憐偶と憎悪とが犇々と迫る。私はさうしてゐる内にこの中の一人をどうにでもして引き取らねば濟まないやうな恐ろしいある魔力の圧迫と切実な愛情の罟〔わな〕に引き墮されて了つたやうな気がする。もう一度怪しい声がしたらどう為やう、あれかこれか、真蒼な私の眼が列の端から端までずつと見渡すと、一緒にその大人〔ませ〕た陋しい、眼の大きく額の白い子供の顔がさも恨めしさうにほろほろ泣いてゐる。

私は愈切迫詰〔つま〕つたと思つた――然し声はそれつきり、いくら待つても待つても

誰も何とも云ふものがない。次第に恐ろしい沈黙と突き放されたような寂しさが切々と私の心を襲ふて来た、恐ろしい、どうにかして逃げ出したい――

チリツンチリツンとまた金の絃を弄ぶ響がする。

＊

私ははつとして、電燈の栓〔ねぢ〕をひねつた。と一緒にかさかさと慌てて逃げてゆく物音が、真闇〔まつくら〕に掻き消された亜鉛屋根から忍びがへしに飛び下り、忍びがへしから板塀の裏を転がるやうに辻り落ちるその迅さ、慌ただしさ…………

逃げたな、畜生！ ほつと吐息をついた、私は今、真闇〔まつくら〕な向ふの路次口に転がり落ちて逃げてゆく猫の滑稽な動作を想像した、而して急に勝ち誇つた感情の弛緩と陋〔さも〕しい皮肉な冷笑とが多少の可笑〔をかし〕みをさへ交へて私の心に突き上げてきた。私はまた何となく軽い安堵を覚えた、而して更に注意深く幽かなその夜明前の微光を透かした。

夜は益々更ける、而してこほろぎがまた恐ろしいお岩稲荷のかげから冷たい硝子玉をす

り合せて鳴きつゐる。

再び電燈をバツと点けた時、私はそこに初めて信実な柿の木の姿を見る事ができた、新しい悲哀〔かなしみ〕と驚異〔おどろき〕、まだ固い真青な柿の実キラキラと厚い葉の簇から銀と緑を射返し、あの華奢な白描のゐたあたりには、ただ空しいコルター屋根の斜面だけが今まるで青硝子のやうに上り輝いて、葉末に残つた露の点滴のみ幽かに光つては消えて落ちた。

こほろぎが鳴く。

私はまた静かに寂しい闇の核心を凝視〔みつ〕めながら、更に新しい靈魂の薄明〔ツワイライト〕を待たねばならぬ。

ふさぎの蟲

大正元年八月二十六日午後四時過ぎ、俺は今染々とした気持で西洋剃刀の刃〔は〕を開く。庭には赤い鶏頭が咲いてゐる。細い四角の西洋砥石に油をかけ、ぴつたりと刃〔は〕を当てると、何とも云へぬ手あたりが軟かな哀傷の辻り続ける。奇異な赤い鶏頭、縁日物ながら血の如〔やう〕な鶏冠〔とさか〕の疣々〔いぼいぼ〕が怪しい迄日の光を吸ひつけて、じつと凝視〔みつ〕めてゐる私の瞳を狂気さす。

鶏頭、汝〔おまへ〕はまるで寂寥と熱意との一揆のやうだ、何時でも汝〔おまへ〕の集団〔むらがり〕さへ見ると俺の気分が鬱〔ふさ〕ぎ出す。

余程眠りこけて居たのか、昼寐から俺が覚めた時にはもう誰一人家内〔うち〕には居なかつた、昼間の活動でも見に行つたものと見える。而して俺一人が装飾〔かざり〕も何にもないガランとした下座敷にぽつねんとかうやつて坐つて居る。何にも為る事がない、た

だもう倦怠〔だ〕るい、仕方が無いので妹の鏡台を縁側に持ち出して又かうやつて剃刀の刃を当〔あた〕る。鶏頭が莫迦に光る、それかと言つてくわつと光つた外光の中に何かしら厭な陰気さが嘲笑〔あざわら〕つてでもあるやうに、赤い鶏頭〔とさか〕が眼に染〔し〕みる、茎が戦ぐ、その根元から小さい蜥蜴が走り出す。

何処かで御大喪中の忍びやかな爪弾の音が洩れる。昼の三味線、赤い鶏頭、それが真赤に陰気にこんがらがると、今度はまたお隣のお岩稲荷から恐ろしいお百度参りの祈願と呪詛との咽び泣きが絶間〔しつきり〕もなく俺の後脳に鋭い映画〔フィルム〕の閃光を刺し通す。

Gen-gen,byo 〔-〕 -soku-byo 〔-〕 ,………… Gen-gen,byo 〔-〕 -soku-byo 〔-〕 ……………お岩稲荷
大明神様…………南無妙法蓮華経…………

日が光る、くわつと暑い空気が淀む、鶏頭が笑ふ……石鹸を剃毛で掻き立てて顔一面に

塗りつけると、白子〔しろこ〕のやうに眼ばかり青く光り出す。剃刀をびたつとつけてすうつすうつと辻らせると寂しい心が無性に晴々する。

それでも鶏頭、鶏頭、俺は悲しい。

真赤な歇私的里〔ヒステリー〕の鶏頭、

お岩稲荷大明神様……………

不図〔ふと〕、俺は気がついた、何といふ坐り態〔ざま〕だ、まるで汝〔おまへ〕の肉体〔からだ〕は白痴の女見たいにぶくぶくだねえ、だらしのない、どんなに暑くたつて、もつとチャンと坐つておるでなさい。

眼が鏡の中で笑ふ、剃刀が咽喉の薄い皮膚を切る、危〔あぶ〕ない、グツと突つ込んだら汝〔おまへ〕は其儘寂滅だ。

——哥兄〔あにき〕や二階で木遣の稽古、音頭取るのがアリヤ良人〔うちのひと〕エンヤラナ……………

にとにとと石鹼が指さきに流れる、気味の悪い、冷たい、かと思ふと何処かで忍び笑ひ

の声さへ聴える、三味線が急にはしやぐ、

……エンヤラヤレコノサア……サノセーアレワサエンヤラナ……

唄どころかい、

俺は苦しい、苦しい、鶏頭、真赤な鶏頭、

日が光る、お百度参りが泣く、俺の後脳が真赤に瞬 [またた] く。

露西亞の所謂トスカではないが、今日此頃は鶏頭さへ見ると俺のふさぎの蟲がしくしくと腹の底から募り出す。

Gen-gen,byo [-] -soku-byo [-] ,…… byo [-] -soku-byo [-] ………お岩稻荷大明神様
………南無妙法蓮華經………どうぞ旦那との縁が切れますやうに………

恐ろしい、真昼間 [まつびるま] に何事だ。

おやお前さんは泣いてるね、鏡の中で泣きつ面 [つら] するのはお止 [よ] しなさい鼻
でも剃り落したらどうします。

鶏頭、鶏頭、真赤な鶏頭。

まだ汝「おまへ」はあの女に未練があるのかいと俺の眼が剃刀の下からにつと笑ふ。

一生の恋だ、命かけての愛だの信実だのと云つた蜜の如「やう」ないつかの抱擁も千言万句の誓ひも歓語「さゞめき」も、但しは狂ひに狂つた欲念の焰「ほむら」も、ただ一息に押しこかしてゆく「時」の力の前には何等の矜持も権威もあつたものでは無い。時は過ぎてゆく、而して凡てが何時となく伝奇的な美しい幻想の色彩「いろどり」の中に掻き消されて了ふ……

ほつと吐息をして眼を瞑「つぶ」る、剃刀が頬辺「ほつぺた」に冷「ひ」やりと沁る……
……怪しい罪惡の秘密と淫蕩な官能の記憶とが犇々と俺の胸を掻き捲る……

も一度逢ひ度い……ハツとして眼を開「あ」けた、嘲笑「あざわら」ふやうに鶏頭が光る。

ほんとにあの鶏頭のやうな女だつた、お跳「はね」さんで嘔吐きで伶俐「りかう」で愚

かで虚栄家「みえぼう」で氣狂で而して恐ろしい悪魔のやうな魅力と美しい姿……

凡てが俺の芸術欲を喉「そその」かし瞞「たぶ」らかし、引きずり廻すには充分の不可思議性を秘「かく」して居た、縦「たと」へ、それが代々木の草原を飛びあるく白栗鼠の兒のやうに或は陋「さも」しく或は輕浮であらうとも俺にはまた却てその無邪氣と痴態とが萎「しほ」らしくも亦憫「いぢ」らしく思はれたのだつた……そればかりか俺も亦釣られて栗鼠のやうに飛びあるいた……而して遂「おしま」ひには二人とも監獄に堕ちて了つた……兎に角……と又右の眼が熟「ぢつ」と靈魂「たましひ」に喰ひ入るやうに覗き込む……汝達「おまへたち」はあまりに夢想家だつた、殊に汝「おまへ」は現実そのものの生活をあまりに芸術に為「し」過ぎた……さうだ、それに違ひないと悲しい左の眼がうなづく……汝「おまへ」が今日のやうな惨「みじ」めな世間の侮蔑と圧迫を蒙るのも当然だ、道ならぬ恋は一度は破滅する、美しい幻影も遂には破れる……さうだもう幻滅だと又左の眼が切なさうに差し覗く……初めそれほどにもなかつた汝「おまへ」が奈何「どう」して又あんなに急に夢中になつて了つたのだ、と右の眼が剃刀の下から嘲る

やうに喰ひ入つてくる…………それは俺にも解〔わか〕らない、只俺の芸術至上主義が俺自身を妖艶な蠱惑と幻感の世界に昏睡さして了つたのだ、罪惡がそこで醸〔かも〕された、つくづく俺は俺の魔法の空恐しさを知つた、而して女の美しさを、…………啜り泣くやうに左の眼が光る。…………誇張してはいけない、一体どちらが悪者なのだ、世間では汝〔おまへ〕の方が正直過ぎた、畢竟〔つまり〕擬宝玉〔にせだま〕を買被り過ぎた、もつと薄情におひやかして逃げて了へば何でも無かつたと云つてゐる。…………有難う、警察でも監獄でもさう訊かれた、一体汝〔おまへ〕達はどちらから先に出したのだと、…………双方の眼が一時に苦笑する…………さういふ上品な世の中だ、疑はる可くして初めて疑はれ、待ち設けた最後の罟〔わな〕に墮つ可くして的確に二人とも墮ちた、而して結末も至極簡単に解決した、それで可い、それで可い、二人のやうな罪囚の痴態はただ美しい伝説の中にのみ生甲斐がある。もう何事も訊いて呉れるな、…………フフン、それではこれ位に切り上げやう、何れにしても汝〔おまへ〕は莫迦だ、飛んでもない阿呆だ、罪人だ、氣狂だ… …さうだそれに違ひないと両の眼がじつとうなづく…

カラカラチーン、チーン、チーン、チーン……気まぐれな隣の自鳴鐘〔とけい〕がもう夜の十時を点〔う〕つ、夕日がくわつと壁から鏡に照り反す。鶏頭が恍惚〔うつとり〕と息をつく、風が光る。

「そばからそばからと起る残念な事、口惜しい事、迫害、いろいろの事情にせめられて平常からきかぬ気の私はとりつめました、自殺と覚悟をきめました、然しここで死ぬのはいや、今一度お目にかかり度い」……

はつとして後〔うしろ〕を振り向いた、誰もゐないガランとした部屋の天井にただ手水鉢の水が斜めに水陽炎を投げてゐるばかり、ちらちら動く、光る、影と影とが逃げてゆく、追ひ廻す……

また向き直ると昼の恐怖が寂〔しん〕として後〔うしろ〕からそつと髪の毛を引つ張る。

「あなた此まま私を放つてお置きになるのですか、純様、ああ純様、恋しき恋しき純様、はやくはやく私を助けて下さい、逃げて下さい、苦しい残念、口惜しい、只一人の姉の同

情で——いづれいづれ私逃げ出します、近いうちにさうして自殺します。」

狂気のやうな女の姿が眼に見える、俺もあの時は夢中だつた。苦しかつた、而して机の上にあつた真赤な眼無達磨を思はず抓みつぶして硝子に擲きつけた、また飛びついて小刀でグサとその白眼玉を刺し通した。さうだ、さうだつたに違ひない。

「私は覚悟致しました、決して決してあなたまで死んで下さいとは申しません、死んでもいい、どうぞ私を引き出して下さい下さい。」

迫つかけてまた手紙が来る、俺も火のつくやうに旅行仕度をする、それでも待てないであのお跳ねさんは到頭身体がもう変だ、見るものも見なくなつたと云つて寄越した、かと思ふとその手紙より先きに大和の笠置から鶺鴒の立つやうに飛んで来た。

南無三！………思ひ出しても身体が顫へる………そこにもうちゃんと恐ろしい罨が二人を待つて居たのだ、それから俺達は飛んでもないところへ旅行して了つた。

嘘吐き、嘘吐き、真赤な嘘吐き、俺は何もかも知つて居る、私に切迫詰「せつぱつま」らして愈心中させる気だつたか、それとも淫蕩な夏の旅行に私を誘「おび」き寄せやうと

したのかを、どつちみち二つに一つだ。俺にしろもうあの時はあの女を思ふさま淫逸な欲
念と熾烈な死と官能の幻惑の中に引きずり廻すより外に途〔みち〕が無いと思つたのだ。

はつと眼を瞑る、

「私はあなたが憎らしい、あなたは私を世の中から、凡ての人から見はなさせて一人ぼ
つちになつた後、いぢめていぢめてつき放さうとなさるに違ひありません、口惜しい、入
らつしやい、ここへあの思ふ存分いぢめて上げ度い、入らつしやい入らつしやい入らつし
やい入らつしやい入らつしやい気がもう狂ひ出しました。」

いつぞやの嫉妬と懸念とに無我夢中になつた女の手紙を思ひ出す。

鶏頭が真赤に光る。

鶏頭、鶏頭、俺は什麼 [どう] 考へても軽薄にはなれない、あの人が恋しい。

行く処まで行く、堕ちる処まで堕ちてゆく。

赤坊〔あかんば〕が啼く、赤坊〔あかんぼ〕が啼く――嘘だ、嘘だ、それは何かの思ひなしだ。

はつと思つて空を凝視「みつ」める、光が蜂蜜の如「やう」にキラキラとふりかかる。

前の電線「はりがね」に雀がチエチエツと飛んで来て交「つる」んだかと思ふとパツと別れた。

「悪因縁だ」――聴てしてほつと眼を下に落して又染々と剃刀の刃を手元に引よせた。

「悪因縁だ」――もう逃れつこはありやしない。

南無妙法蓮華経………

まだまだあの女将「おかみ」はやつてゐる。キリキリと砥石に一当「ひとあて」あてて、じつと聴くともなく刃「は」を返すとホロリと涙が落ちた。

弱蟲………苦痛と凌辱との思ひ出が切々と蘇る。未決監を出てからもう彼是一と月、その間、日となく夜となく緊張し切つた俺の神経はまるで蠡斯「きりぎりす」のやうに間断「きり」もなく顫へ続けた。狂気と錯乱とがもう俺の目前に赤く笑つてゐる。さもなくとも俺は短命だ、ただ一息に俺は俺の息の根を吹き続けるより外に仕方がない。

Gen-gen,byo [-] -soku-byo [-] ,………… Gen-gen,byo [-] -soku-byo [-] ……… 苦しい、
苦しい、奈何 [どう] かしてくれ、真赤な地獄絵の映画 [フィルム] がキラキラキラキラ
俺の後脳に烙きつく。ふさぎの蟲がしくしく募る。

ワンツワースの牢獄に初めて謙虚な悲念に掻き暮れ得た驕慢な天才兒の末路は汝 [おまへ]
へ] にいい訓戒だ。

さりながらあの市ヶ谷の監獄生活は誠に貴い省察と静思との時間を汝 [おまへ] に与へ
たと、鏡の中から悲しげな両の瞳が熟視 [みつ] める…………

あれから苛酷な世の嘲笑と圧迫は日夜続いた、それでも汝 [おまへ] は能く耐へた、と
又剃刀が冷たい辻りを額に続ける…………

鶏頭、鶏頭、記憶は悲哀を再燃させる。汝 [おまへ] が初めて町の安床に行つた時……
…と又眼が憎さげに顫へる…………がらがらと駆けて通つた囚人馬車がまるで汝 [おまへ]
の頭を轢き潰 [つぶ] して鏡一面 [いつぱい] に黄色く光つて行つた時、あの狎のやうな

下司ばつた顔の親方が何と云つた。

「囚人馬車の癖に宮様のやうに威張りかへつてのさばりやがる……一体あんに中に幾人[いくたり]乗つてやがるんだらう……あんな罪人なんて奴は何だね樺太三界にでも追放[おつぱら] つちまつた方がいいんだ、ねえ旦那。」

その時の汝[おまへ]の顔つたら無かつたぜ、「どうせ監獄の御用馬車だ、お客さんはせいぜい十人か十一人に極つてゐる、さうだあんな罪人は樺太にでも追放したがいい」汝[おまへ]は顔を真蒼にして顫へたつけね、それからその翌日は……と又剃刀が眼と眼の間に顫へる……寄席の鈴本で、あの眼のクルクルと大きい厭味な洋服姿の秋月の奴が現在汝[おまへ]のある前であのキザな十題話の落しに面白をかしく間男の意見をして見せた。あの時傍に小さくなつて居た弟が、あの内気な弟が顔を真赤にして兄さん兄さんと汝[おまへ]の袖を曳いた。「心配するな、俺はもう何と云はれたつて姦通者に相違ないのだ、皆が皆寄つて群[たか]つて苛めるならもつと苛[いぢ]めろ、もつと苛[いぢ]めろ、一層[いつそ]の事ぐいと銀の槍でも突き通せ。」汝[おまへ]の心はもうその時轟

と優しい Tinka John の身体を抱き擁めてゐたつけね。又その翌日は……思ひ出しても厭やな暑い日だつた……苦しさ紛れに飛び込んだあの汚い八丁堀の大路次亭では見るからに貧乏臭い瘦せぎすの講釈師が頓狂に顔を顰め乍ら張扇をペタペタと叩いてゐた。而してまた汝「おまへ」の面前でヤンヤと人を笑はせた、……さうだ俺はよく知つてゐる、だらしなく昼寝してゐた爺までが齒の無いモガモガの口をあけてフナフナと笑ひ転げたあの時だ……「へえい、小桜さんの花魁「おいらん」、ええ、あの花魁は」と頭を掻いて番頭が「実はなんでゲス、恰度昨日で年が明けましてな、それで店の吉どんと一緒に国へとか申しましてついさきほど立つて行つたばかりで、へい。」「ナニ、国へ歸つた、国、国とは一体何処だァ。」「へえ、吉どんの故郷とかで。」「吉の故郷は何処だァ。」と黄色い声をして、金を貢「みつ」いで挙句のはてに欺された旗本の野呂馬息子が齒噛みをする。「筑後の柳河ださうで。」「筑後の柳河ア。」口惜しさうに声が泣き出す。「へえ、大分遠方で、何でも長崎の傍「そば」ださうで、えつへつへ。」さうだ、如何にも俺の故郷は筑後の柳河だ、それがどうした。笑ふにも笑はれない、何といふ惨「みじ」めさだ。汝「おまへ」

は思はず敷島の袋をぐいぐい抓みつぶして了つたつけね。

Gen-gen,byo [-] -soku-byo [-] ,………… Gen-gen,byo [-] -soku-byo [-] ……………お岩稲荷
大明神様…………どうぞ御願ひ奉る…………

喧 [やか] ましい、鶏頭、鶏頭、俺の肝の蟲がもう弾ちぎれさうだ。

暑い、暑い、くつわ蟲が啼く、蝸 [かなかな] が啼く、くわつと外光が眼ににじむ、陰
気な鶏頭がまた真赤に心のどん底から笑ひ出す。それだのに何としたか意久地なしの靈魂
[たましひ] がまたトス力的に滅入 [めい] り込む、気が悄気 [しよげ] る。ポロポロと
涙が零 [こぼ] れる。

不図眼を落すと、鏡台の上に空になつた香水の壺が載つて居る、その白いレツテルの腹
の上に又小さな一寸蠟燭を立ててある。家内 [うち] の Tinka Ongō でもやつた事だらう、
面白い、と一寸妹に感心する、而して又物好きな心はその寂しい心の尖にしんみりとマツ

手を擦りつける、と昼の焰が微かに燃える。鏡の面〔めん〕を少し立てるとその中に声もなく焰が吸ひ込まれる。而して真昼間だのに俺の心の心が幽かに泣き初める。

汝〔おまへ〕は我儘だつた、而してあまりに芸術上の趣味なり嗜好なりに贅沢過ぎた。譬へ天真の稚氣と信実とが絶えず心の底に昼の蠟燭の様にちろろめいてゐたにもせよ、馴れ過ぎた天の恩寵と世の浅はかな賞讃とが何時しか汝の貴重な靈性を盲目にした。怪しい感覚と不可思議な官能の幻感が又汝の肉体を思ふさま翻弄した。

汝は家庭に於ても一種の暴君であつた。それかと云つて汝ほどあの寂しい人々の間から尊敬と愛慕と信頼とを集め得たものはない、汝は七情の赴く儘に色を換ゆる無邪気な光のかめれおんであつた。然しまた豹のやうな空恐ろしい愛情の残虐をも敢てした、また怪しい魔法使ひの鞭のやうに凡ての肩の上に柔にその恐怖と愛憎の吐息とを投げかけた。汝はいかにも優しくかつた、温かであつた、然し又気まぐれで、神経質で、能く怒り、能く苦しんだ。例へばその時折の衣服の調色〔いろあひ〕、ある日の汗の臭などの些細の感覚の不愉快から終日母の傍に坐る事さへ苦痛にしたほど我儘で又驕奢であつた。

然し汝「おまへ」が一日家に居ないと家中の者は皆陰気な蓴菜「じゅんさい」のそばからふいと温かな麝香猫でも居なくなつたかのやうに何時も妙に滅入つて了ふのが眼に見える。現在汝の弟は汝の芸術の第一の崇拜者ではないか、剩へ汝の婆やなどはまるで汝一人を神様か活仏のやうに頼り縋つて居る。實際、かういふ滑稽な盲信位難有迷惑な事はない。だがよしや汝が世間から棄てられ笑はれ嘲られても汝の肉親の凡ては汝に縦「つ」いてゆく、而して善かれ悪かれ汝の為る事には頭「てん」から信じ切つて居る。

何が仏だ、思はず手に持った剃刀を向ふの壁に投げつけた。キリキリ突き立つてピヤンと跳ね返る。

印度の仏と能くあの若い独逸の画家に戯けた手付で例も皮肉な礼拝を受けさせられた熱帯系の菩薩面がニコリともせず鏡の中で顫へてゐる。厚い唇が今日は不思議に真赤に見える。昼の蠟燭が鼻の真向「まつかう」にしんみりと光り輝く、眼と眼とが凝「ぢつ」とその底から吸ひ付くやうに差覗く…………つくづくと陰影「かげ」と靈魂と睨み会つたまま底

の底から自愛と憐憫の心とが切々と滲み出る。「ほんとに瘦せた。」ほつと吐息をしてまた俺の気分もあれから随分変つたものだと思ふ、どんな苦痛と羞辱とに身を鞭れ曝されても持て生れたデリケエトな誰にも懐かしがられるあの貴い心持丈は少しも傷けないで居れたと自負する心の裏から、流石に陰しくなつた額付や皮肉な口元の痙攣〔ひきつり〕さへ目につく。

ぢつとこみあげてくる哀傷の一念を抑えて、剃り立ての真蒼な面の光沢を冷々〔ひえびえ〕と労ると、暑い夏の日にもしんみりと靈魂〔たましひ〕の冷たさが身に染みる。

全く誇張された同情や信賴や愛情の過剰な負債には堪へられない、堪へられないばかりか或時は寧ろ嫌悪と反感と冷酷な肉親の呑嚙をさへ感ぜしめる。どうかして切り抜きたい、独になりたい、そればかりに俺は思はず血で血を洗ふやうな残虐な暴君にもなつた、罪人にもなつた、親不孝者にもなつた。かと云つて俺は俺の貴い靈魂をこれ以上に自ら侮蔑し傷け墮落させる事は出来ない、剩へ俺の肉体を血まみれに刺し貫いて俺自ら陋しい賤民の死体のやうに大道の真中に放棄〔うつちや〕り放す訳にはゆかない。俺は俺自身が愛

惜 [いとし] い、命が惜しい、死に度くない、況して嘘か真実 [ほんと] か第三者の中傷か、いざとなつたら二人のどちらが罪が重くなるだらうと一時はわなわな顫へたといふ、あの軽薄なお跳ねさんなんぞと一緒に死んでどうなる――

俺が自殺したら無論肉親の一人二人は墓場迄も縦いて来るだらう――これは偽りでない――而してあの女でもひよつとかしたらあの可愛い小さな心臓を今度は戯談でなしにキユツとピンの尖きで突き刺して笑つて眠て了ふかもわからない。然し俺は心中は御免だ――独で死ぬのももう厭になつた。たつた一人で生き度い、命が惜しい。

それはいつぞやは死なうとも思つた、俺の好きな植物園の薬草花壇で、毒薬を喫んで、あの大蒜 [にんにく] の根や、茴香の蕾を抓み散らして、精一杯に苦んで、藻掻いて血を吐いて、而して笑つて真蒼に腐つて了ひ度い――とも思つた。然し母迄がおせつかひにも一緒に自殺でも為さうな気振に見えたので、急に俺は不愉快になつて、その足で浅草の活動写真見に飛んで行つて了つた。

毒薬と云へばあの俺がある種類の予防に納 [しま] つて置いたあの甘汞を、何と間違へ

たか、蒼くなつて慌てて秘〔かく〕して了つた俺の弟はほんとに可哀い道化ものだ。

鶏頭、鶏頭、俺の弟はほんとに可哀い道化ものだ。

時が経つ………蠟燭の火がちちと幽かに瞬く。

鶏頭、鶏頭、

記憶に悲哀は再燃する、切迫詰〔つま〕つた俺の感覚が四〔よつ〕ん匍ひになつて剃刀を拾ひかける、ハツと靈魂〔たましひ〕が後から呼び返すと意久地もなくパタリと身体が平べつたくなる、苦しい涙がポトリポトリと額を抑えた手の甲に零れる………

轡蟲が啼く………唐突〔やには〕に座り直して、ぐいと右の指を二三本白粉の瓶に突つ込む。ぐるぐると搔き廻してぺたりと面にぶつつける、………ふさぎの蟲がクスクス笑ふ………狂者〔きちがひ〕、狂者、まるで汝は狂者だ、慥〔か〕うして居る中にも頓狂な発作の陰謀〔たくらみ〕が恐ろしい心のどん底から可笑〔をか〕しいほどはしやぎ出す、白粉〔おしろい〕を水にも溶かさないでべたべた塗りつける、にとにと面が突張〔つつば〕

る、眼が光る、見る見る能のお面のやうに真白に生色のない泣つ面〔つら〕が出来上る。さうでもないか、此奴〔こいつ〕、解剖学の標本室で見た死刑囚の白い面型その儘だ、さうだあの面型には眉の毛が二三本赤つちやけてくつついて居たつけな――ここまで揶揄〔からか〕つて来て俺ははつと思つた、能い加減に巫山戯け散らしてゐた靈魂がピタと緊張〔ひきし〕まる。眼が黒く光り出す、急に恐ろしくなつて粉紅〔こなべに〕の円い球をぐいと右の頬辺〔ほつぺた〕ににじりつける、と紅い日の丸の烙印が如何にも道化らしくパツと燃え出す、面白い、左へもひとつぺたりとにじりつける、あはは、泣つ面〔つら〕がやつと笑ひ出した。立派な戯奴〔ヂヤウカア〕だ、これでひとつ浮かれて退けるか。

活惚〔カツボレ〕、活惚〔カツボレ〕、何処かでまだ三味線を弾いてゐる。ついと立つて紅い道化頭巾を冠る、浴衣を脱ぐ、薄いシャツ一枚になつて、さて眉から鼻、口元と白粉を均〔なら〕す、長い瞼毛〔まつげ〕の周囲〔まはり〕を青インキで濃く隈をつける。

隈と云へば未決監では面白かつたな、とクスクス皮肉な笑が咽喉のぐりぐりにこみ上げる。ねえ汝〔おまへ〕は贅沢だつたよ、牢屋に居ながら三度三度、スープに洋食を三品宛、

それに果実は欠かしつこなし、あまり辛気なので食べ残しの水蜜桃で真紅な自画像をぬたくりつけてひどく叱られたつけな、あの挿話〔エピソード〕は誰に聞かしたつて腹を擁〔かか〕へるだらう、この悪戯者〔いたづらもの〕はその翌日看守長から鹿爪らしく呼び出された、それはかうだ。「三八七番、この真紅〔まつか〕な面〔つら〕は何だ。」「それは私の顔で御座います。」「何で画いた。」「水蜜桃の腐れたので描きました。」「ぢやあこの黄色いのは何を用〔つか〕つた。」俺は髪の毛をもじやもじやと真黄色になすりつけたのだ。

「それはバタで。」「この点々〔ポチポチ〕は何だ。」「それは辛子〔からし〕で御座います。」「青い眼玉はどうした。」俺はつくづく苦笑した、「それはサラダを絞〔しば〕りましたので。」一帖の半紙を一枚翻〔めく〕ると矢つ張り下も俺の真赤な顔が泣つ面をしてゐる。また翻〔めく〕ると矢張り黄色く滲み込んでゐる、また一枚また一枚、矢つ張り青い眼玉が光つてゐる。俺ははらはらしながら自分の面の皮でも一枚一枚ひん翻〔めく〕られるやうに辛かつた…………

ぶつと吹き出して立ち上ると、活惚、活惚、三味線が調子をつける。

Gen-gen,byo [-] -soku-byo [-] ,………… Gen-gen,byo [-] -soku-byo [-] ……………お岩稲荷
大明神様……………南無妙法蓮華経……………どうぞ商売繁昌致しますやうに……

鶏頭、鶏頭、俺はもう気が狂ひさうだ。

活惚、括惚、甘茶で活惚、ヨイトナ、ヨイ、ヨイ、…………

くるくると二つばかりとんぼがへりをする。ガランとした部屋の中に、たつた一人、真
白な面を緊張〔ひきし〕めてくるくるともんどりうつ凄さ、可笑〔をかし〕さ、又その心
細さ、くるくると戯〔おど〕け廻つて居る内に生真面目〔きまじめ〕な心が益落ちついて、
凄まじい昼間の恐怖が腋の下から、咽喉から、臍から、素股から、足の爪先から、空一面
〔そらいつぱい〕に拡がり出す。

鶏頭が真赤に真赤にひつくりかへる。

頭〔あたま〕の映画〔フィルム〕がキラキラキラキラひつくりかへる、蝸〔かなかな〕
が鳴く、お百度参りが泣く、三味線が囃し立てる。

活惚、活惚…………

三味線がハタと止む……………

と、くるくると転〔ころ〕がつてゐる俺自身が俺にももう恐ろしくて恐ろしくてたまらなくなつた、思はず投げつけられた盗賊猫〔どろぼうねこ〕のやうにぼんと起き直るとその儘パタパタと二階に駆け上つた。

昼の蠟燭がまた幽かに取澄まして瞬く。

それから暫時経〔しばらくた〕つて、殆素つ裸の俄作りの戯奴〔ヂヤウカア〕は外の出窓に両脚を恍惚〔うつとり〕と投げ出して居た。而して今霊岸島の屋根瓦の波の上にくると落ちかかる真赤な太陽の光を凝〔ぢつ〕と眺めて居る。雲の影ひとつ見えない大空の果に鳩が火の玉のやうに飛んで居る。煙突の煤梱がくさくさと渦を巻く、電線が光る。

それでも、向ふの土蔵の屋根の上に枯れかかつた名も知れぬ雑草がしんみりと戦ぐでもなく戦〔そよ〕いでゐるのが眼に付いた、その僅な二三本しかない幽かな草の戦ぎがぢつ

と熟視〔みつ〕めて居るうちに、先程の活惚騒ぎで取り落したふさぎの蟲をまた染々とぶりかへす。草が戦ぐ、また意久地なしの靈魂〔たましひ〕が滅入つて了ふ。悄氣〔しよげ〕る、鬱〔ふさ〕ぐ……………涙がホロホロと頬つぺたを流れる。

と Gen-gen,byo [-] -soku-byo [-] ,………… Gen-gen,byo [-] -soku-byo [-] ……………

急に寂しくなつて、まじまじと下を向く、とまた生憎な、目に入るでもなく庭の垣根越しに向ふの長屋の明け放した下座敷が見える。

おや、もう電燈〔でんき〕が点いて居る。昼間の光に薄黄色い火の線と白い陶器〔せともの〕の笠とが充分〔いづぱい〕にダラリと延ばした紐の下で、畳とすれすれにブランコのやうに部屋中揺れ廻つて居る、地震かしらと思ふ内に赤坊〔あかんぼ〕が裸で匍ひ出して来た、お内儀〔かみ〕さんが大きなお尻だけ見せて、彼方〔あちら〕向いて事もあらうに座敷の中でパツと紺蛇目〔じゃのめ〕傘を拡げる。かと思ふと何時の間に歸つて来たのか末の弟が廁の中から博多節か何か歌つて居る。

変だ、何だか何処かで火事でも燃え出しさうだ、空が焼ける、子供が騒ぐ、遠くの遠く

で音も立てずに半鐘が鳴る…………おや、俺の脳髓〔あたま〕までが黄〔きな〕くさくなつて来たやうだぞ…………犬までが吠え出した…………何か起るに相違ない。

南無妙法蓮華経…………お岩稲荷大明神様…………

苦しい、苦しい、汗が流れる。

恰度こんな暑い日だつた、俺は監獄で…………と戯奴〔ヂヤオカア〕が面を顰〔しか〕める…………俺は監獄であり監房〔ヘヤ〕の臭気が陰気なので、汚ない亜鉛の金盥に水を入れて、あの安石鹼を溶〔とか〕しては両手で掻き立て掻き立て、強い弾ぢきれさうな匂を息の苦しくなるほど跳ね散らしてゐた。

真白い細〔こま〕かな泡と泡とが、緑に、青に、紅に、薄黄に、紫に、初めは紫陽花、終まひには、小さな宝玉に分解して数限りもなく夏の暑熱と日光とに光る、眩やく、泣く、笑ふ、嘲る…………恍惚〔うつとり〕と見入つて居ると、コツコツと隣の厚い壁板を向ふで敲く。そこで、俺も泡まみれの手でコツコツと合図をして「奈何〔どう〕したの。」と腰をかがめる。

「今日〔けふ〕は盆の十六日ですねえ。」と気のない疲れた声が投げ出すやうにきこえる。

「さうだ、盆の十六日。」と俺も一寸可笑〔をか〕しくなる。

「もうつくづく厭になつちやつた、ああああ……………」

これがこの二月に浅草で友達を殺した男の声かと思ふと、何となく変な、不憫な、厭〔いや〕あな気がする。二月から入監〔はい〕つて、まだ一度か二度法廷に引つ張り出されたつきり、まだ刑も極らず、放〔ほつ〕たらかしにされて居るのである。飽き飽きするのも無理もない。

暫時〔しばらく〕黙〔だま〕つて居ると、またコツコツと甘へるやうに背後〔うしろ〕を敲く。

「何だね。」

「あの鞆丸〔きんたま〕抓んだら死ぬんでせうか。」

不意に俺の眼が笑ひ出した。

「そりやあね、ギユツと抓んだら何時 [いつ] でも死にます。」と口を寄せて、また物好きな道化心が笑ひ出す。

「だが、一体誰 [だれ] が抓むの誰の辜丸 [さんたま] を。」

「私 [あつし] が抓むんですがね。」

猫のやうに頓狂な声がした。

と、思ひ出すと、取り澄ました俄作りの戯奴 [ヂヤオカア] が一時に真白な顔の造作を破裂さした、はははは、自分でも吃驚 [びつくり] するほどの大きな声を挙げ乍ら、腹を擁へて出窓から畳の上に転げ廻つた、而して又転げ廻つて転げ廻つて世界中がひつくりかへるやうに笑ひ続けた。

ははははは……………

ははははは……………

桐の花目次

歌

銀笛哀慕調

- I 春……………二七
- II 夏……………五一
- III 秋……………六三
- IV 冬……………六七

初夏晩春

- I 公園のひととき……………七五
- II 郊外……………八一
- III 庭園の食卓……………八五

IV 春の名残……………九五

薄明の時

I 放埒……………一二五

III 踊子……………一三九

III 浅き浮名……………一四五

IV 蟾蜍の時……………一五三

V 猫と河豚と……………一五九

VI 路上……………一六五

雨のあとさき

I 雨のあとさき……………一七七

II 昼の鈴蟲……………一九五

秋思五章

I 秋のおとづれ……………二〇七

Ⅱ 秋思……………二一三

Ⅲ 清元……………二一九

Ⅳ 百舌の高音……………二二五

Ⅴ 街の晩秋……………二二三

春を待つ間

Ⅰ 冬のさがけ……………二六一

Ⅱ 戯奴……………二六九

Ⅲ 雪……………二七三

Ⅳ 早春……………二八五

Ⅴ 寂しきどち……………二九五

白き露台

Ⅰ 春愁……………三〇五

Ⅱ 夜を待つ人……………三一五

Ⅲ なまけもの……………三二三

Ⅳ 女友どち……………三二九

Ⅴ 白き露台……………三三七

哀傷篇

哀傷篇序歌……………一〇三

哀傷篇……………一〇四

続哀傷篇……………三九五

哀傷終篇……………四一一

小 品

桐の花とカステラ……………七

昼の思……………一〇一

植物園小品……………二四一

感覚の小函……………三四七

白描……………四二五

ふさぎの蟲……………四四九

挿 絵

扉 絵

桐の花とカステラ

たんぽぽ

葱と紫蘇

蛭

道成寺

銀座

上海

泪芙藍と磁石

雪

白き露台

露のおきふし

鳳仙花

白猫

昼の三味線

欄画

ココア外二十種

集のをはりに

数少きわが歌の中より、選びて僅に四百余首を得たり。わが歌はかの銀笛哀慕調のいにしへより哀傷篇四章の近什にいたるまで、凡ては果敢なき折ふしのありのすさびなれども、今に及びては旧歡なかなか忘れがたし、ただ輯めて懐かしく、顧みて哀愁さらに探し。

処々に挿みたる小品六篇のうち、「桐の花とカステラ」「昼の思」の二評論は時折のわが歌に於ける哀れなる心ばえのほどを述べたれども、そはわが今のつきつめたる心には協はず、ただ詩のみ、余情のみ、うはかはのただひとふれのみ。

わが世は凡て汚されたり、わが夢は凡て滅びむとす。我がわかき日も哀樂も遂には皐月の薄紫の桐の花の如くにや消えはつべき。

わがかなしみを知る人にわれはただわが温情のかぎりを投げかけむかな、囚人 Tonka John は既に傷つきたる心の旅びとなり。

この集世に出づる日ありとも何にかせむ。慰めがたき巡礼のそのゆく道のはるけさよ。

この心を誰か悲しく弄ばむやんごともなし
やんごともなし

一九一二、初冬

著 者

桐 の 花 をはり

■このファイルについて

標 題：桐の花

著 者：北原白秋

発行所：東雲堂書店

大正二年一月二十五日発行

表記：以下のように扱いました。

●誤字・脱字・番号のふり方等は訂正せず、底本通りとしました。

●本文のかなづかいは、底本通りとしました。

●旧字体は、現行の新字体に替えました。新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

●繰り返し記号の「／＼」は用いず、同語反復としました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：2005年8月20日